

○湯長谷城・廁

殿様の内藤政醇(まさあつ・23)が廁にしやがみこんで不安な顔をしている。

政醇 「狭いのう……」

政醇の前の扉(開き戸)は開け放たれ、長い廊下が見える。

○同・同・外

開いた戸に『けして閉めるべからず』と書かれた紙が貼られているが、風が吹いてハラリと落ちる。

側女Aと側女Bがやってくる。

側女A 「(緊張して)本日より、よろしくお願ひします」

側女B 「しっかり、お勤めなされ。なあに、政醇様は温厚で気取らぬお方。堅苦しくすることははない」

側女A 「はい」

側女B 「ただ、一つだけ、注意することがあるのじゃ……」

側女A 「あ！」

側女A、扉が開けっ放しになっているのに気づき、機転を利かしたように、厠に走りより、扉を閉める。

側女A 「開けっ放しになっておりました」

側女A、にっこり笑う。

側女B 「バカもの！」

側女A 「えっ？」

政醇の声 「ああっ！」

城中に響き渡る政醇の声。

側女A 「い、いったい……!!」

政醇、扉を打ち破って、ふんどし姿で飛び出してくる。

側女B 「申し訳ございません！」

側女B、平身低頭。

政醇 「愚か者っ！ 扉は閉めるなどあれほど……」

側女B 「新入りにごさいます。何卒お許しくださいませ！」

側女B、ひれ伏す。

側女A、呆然と突っ立っている。

側女B「(側女Aの裾を引っ張り)これ！政醇様の御前であるぞ！」

側女A「(気づいて)えっ、殿様！？これは……」

側女Aもひれ伏す。その顔を、風に吹かれた政醇のふんどしが覆う。

側女A「！」

政醇「これはすまぬ」

側女A、ふんどしを振り払うが、何回もふんどしがまとわりつく。

側女A、それでも無理をして、かしこまる。

側女A「いえ、大丈夫でございます」

政醇、すばやくふんどしを仕舞い、ようやく落ち着く。

政醇、側女Bに向かって、

政醇「叱るな。しかし、よくしつけよ」

側女B「はい……」

側女B、ひれ伏す。

政醇、ふたたび厠に入る。戸は開け放たれたままだ。

側女B「ふう……」

側女B、ほっとした顔。

側女A「これはいったい？」

側女B「殿様はな、閉め切った場所がお嫌いなのじゃ」

側女A「まあ、そのようなことが……」

側女B「以後、どこであれ、殿様を閉じ込め

ぬよう注意するのじゃぞ。わかったな」

側女A「はい」

側女A、立ち去りながら、厠の方を見てくすつと笑う。

側女A「面白い殿様……」

○同・同・中

座っている政醇。

政醇「むむ、出ぬな。中途半端なことになつてしまったわ」

政醇、顔を真っ赤にして力む。

政醇「しかし、これは恥じやの。藩主ともあろう者が口惜しい……」

「ぎい、と扉のきしむ音がする。」

政醇、おそろおそろ顔を上げる。

風の音がして、扉が閉まろうとしている。

政醇「……!!」

政醇、慌てて扉を支えようとするが、服がひっかかって、こけてしまい、間一髪で扉が閉まる。

政醇「(青ざめて)ああっ!!」

側女Bの声「殿! 殿、大丈夫でございますか!」

政醇、扉に手を伸ばして、

政醇「頼む! 開けてくれ!」

○タイトル「超高速! 参勤交代」

○磐城国磐前郡・湯長谷城・俯瞰

春。梅の花も見える美しい景色。

湯長谷城は館と言つていいような小さな城である。

T「元文元年(1736年)、湯長谷城」

N「元文元年、將軍・徳川吉宗の時代、磐城国、湯長谷藩は現在の福島県いわき市にあった。在所は江戸から60里、一万五千石の小藩であるが、藩主・内藤政醇は人柄暖かく、庶民に愛されていた。……しかし、この年、湯長谷藩は、かつてない騒動に巻き込まれたのである」

○街道

早馬が走ってくる。

馬に乗っている武者、必死の表情。

○湯長谷城・中

政醇、食事をしている。

膳には小さな鯛。政醇は細かなところまで、せせるようにして食べている。

政醇「鯛は裏返して食べる二日目か旨いの」

政醇、熱心に身をほじっている。

その対面に、家老の相馬兼嗣(かねつぐ・42)が座り、深刻な顔をしている。

丁「湯長谷藩 家老 相馬兼嗣」

相馬「享保の大飢饉より、財政がおもわしくありません。もう少し年貢をかけることも考えねばならぬかもしれません」

政醇「いかん。昨日、田畑を見てみたが、作物にまだ勢いがない。土がまだ本当になつてない証拠じゃ。……なあに、我らが耐えれば良いだけよ。(自分の鯛を見て)今後はコウナゴにするか……」

相馬「恐れ多きこと……。しかし殿、足輕などは傘を張り、籠を編んで生活の足にする有様で……」

政醇「わかっておる。去年の参勤交代で蓄えもほとんどなくなった。困窮した我らに、謀反の余地など、ないものをな……。せめて、白水村に望みがあればのう」

相馬「あれは、とんでもない金山でございましてなあ……」

廊下を激しく走る音。

武者Aの声「殿おお！ 一大事でござりまする！」

武者Aが転がるように飛び込んでくる。

相馬「落ち着いた様子で何事じゃ。武士のくせに、そのように取り乱すやつがあるか」

武者A、言葉が出ない。

政醇「江戸から早馬で来たのか？ これ、水を持ってい」

側女A、茶碗で水を持って入ってくる。

武者A、それを一気に飲み干し、

武者A「殿！ これから七日のうちに参勤交代せよと、上様からのお達しです」

政醇「！」

相馬「なんじゃとっ！」

相馬、立ち上がろうとしてよろめき、こける。

相馬「(慌てふためいて)そ、そ、それはま、とかか！？」

武者A「はいっ。江戸屋敷の方で必死に聞き

回りましたところ、どうやら、ご老中・松平信祝(のぶとき)様のお調べで、我が藩の金山の届出に偽りありとの疑いがあり、そのような沙汰になったと思われます」

相馬「馬鹿な！ 嘘など申さぬ！ それに参勤交代は一年おきの定め。我が藩はわずか1万5千石じゃぞ……。蔵には銭もなく、こおろぎが遊んでおるだけだわ！」

武者A「しかし、江戸に参らねば、我が藩はお取りつぶしに……」

武者A、苦渋の顔を伏せる。

政醇「大変なことになったのう」

政醇、腕を組む。

○参勤交代の絵図

参勤交代の絵図をバックに、

N「参勤交代とは、各藩の大名を定期的に江戸に出仕させる事により、各藩に財政の負担を与え、諸大名の叛乱をおさえる仕組みである。この時代、大名は一年ごとに行き来していた」

○湯長谷城・中

政醇と相馬と武者A。

政醇、すつくと立ち上がって、

政醇「すぐに支度せよ。七日のうちに江戸に行く」

相馬「しかし、いつもの参勤では、十日はかかりません。そして費え(ついで)も、もはやござりませぬ！」

政醇「金がなくても、お主には知恵があるう、兼嗣」

相馬「う……。しかしこれでは、あまりにも……」

政醇「近頃、江戸城内では勢力争いが盛んだと聞く……。我らのような小藩や、その民が、見たこともない金を動かしてな」

相馬「確かに、武芸より権謀術数を尊ぶと聞き及びます」

政醇「狙いは金山か。無理難題を押し付けて、

我が藩をお取りつぶしにし、勢力争いの費えにしようとしているのだろう」

相馬「老中・松平信祝様といえ、飽くことなく老中首座の地位を狙っていると聞きませす」

政醇、思わず背後の刀をつかんで立ち上がる。

政醇「おのれ、小藩と思い侮りおって！金の匂いに溺れたか！我ら戦国の世から武芸百般を尊び、誠実だけが取り柄の家柄。

江戸に参り、こたびの子細を聞いて、事と次第によつては……」

相馬「……(つばを飲み込む)」

政醇「余にも覚悟がある！」

政醇が居合い切りで、壁にかけてある竹筒花入れの、花の首を切り飛ばす。

相馬「殿……。赤穂浅野家のことを思い出されませ。我が藩が潰されたら、領民たちのことを、なんとなされます」

政醇「むう……」

政醇、齒噛みして縁側に出、庭を見つめる。

美しい石庭。

政醇「吉宗公は名君と聞き及ぶが……。これはいったいどうしたことなのじゃ！」

政醇、厳しい表情。

○江戸城・外観

T「江戸城」

○江戸城・信祝(のぶとき)の居室

豪華な金蒔絵の漆膳で食事をしている松

平信祝(のぶとき・53)。

T「老中・松平信祝」

お庭番の夜叉丸(やしやまる・35)が対座している。

信祝は公家のような小さな眉をし、口には紅を塗って紅い。

夜叉丸「湯長谷藩を潰すのでござりますか？」
信祝「そう、去年の参勤交代で、上様に大根

を献上した、あの貧乏大名よ。ホホホホ……。ようやく帰ったばかりなのに、またもう一度、出府せよと命じられて、肝を潰しておろう。愉快じゃ」

信祝、笑いに身をゆすって、五枚ほど重ねられた鯛の背の、ひとつまみだけ身をむしって食べる。

夜叉丸「金山の蓄えは豊かと隠密から知らせが入っております」

信祝「金(かね)の使い方も知らぬ田舎者に、金山はもつたいたい。まさに猫に小判よ。ホッホッホ……」

信祝、夜叉丸を見て、

信祝「夜叉丸。主らお庭番も、もはや我が手の内じゃ。上様も間が抜けておる」

夜叉丸「……」

信祝、ひとつまみだけ身をむしった鯛を脇にどけ、新たな鯛の身をむしって食べる。

信祝「鯛は旨いところが少ないの」

夜叉丸「……御意に」

信祝「旨味以外は不要よ。金山を手に入れれば、田舎侍どもには、骨となつてもらおうぞ」

信祝、鯛をまた無造作にどけて薄く笑う。

○山中(夜)

山に茂った木々。

一本の木の幹に、手裏剣がカカカン！ときれいに十字に並んで刺さる。

木々の間を素早く飛び回る人影の数々。やがて、それらは草地に降り、分身していたのが、一つに収束する。

それは忍者の雲隠段蔵(くもがくれ・だんぞう 38)であった。

段蔵「腕が戻った。ようやく……」

段蔵、感じいつている。

段蔵「お美代。今頃どうしているか……」

段蔵、月を見つめる。

段蔵「ところで、ここはどこだ？」

段蔵、ふところから絵を取り出す。山の地図である。

段蔵「こちらが良（うしとら）。と……ことは……」

実は方向音痴の段蔵、絵を持ったまま、身を回し、

段蔵「こちらか？ いや、どうやら、こっちか……」

段蔵、走っていく。

○湯長谷城・中(夜)

政醇と相馬、東国の地図を見て話し合っている。

政醇「江戸へは、磐城街道から水戸街道を行くのであったな」

相馬「それでは間に合いませぬ。ここを抜けます」

相馬は、朱筆で、山間部を直線的に走る線を引く。

政醇「大丈夫なのか？」

相馬「いかに山道とて、間道や獣道がありましよう。かつて信長公も桶狭間で……」

政醇「わかったわかった。続きを申せ」

相馬「肝心なところは宿場町でござる。つまりここ……」

指しているところは、高萩宿など大きな宿場町。

相馬「そこだけ、渡り中間(ちゅうげん)を雇い、大名行列の威容を見せれば良いのです。宿場町の陣屋の覚書も手に入りまよう」

政醇「なるほど。さすれば、長々と列を組まずに済むな」

相馬「あとは少人数にて、山道を全速力で駆け抜けます。人をできるだけ少なく、そして短い期間で到達するほど、金はかかりませぬ」

政醇「宿はどうするのじゃ？」

相馬「……野宿にございます」

政醇「ううむ……」

政醇、腕を組んで渋い顔。

相馬「むろん、殿には早馬にて先に進んで頂き、牛久宿にて落ち合うことにいたします」

相馬、地図の牛久宿を指す。

政醇「余だけが樂をするようで気が進まぬな」

相馬「何を申されますか。殿様に野宿などさせるわけには参りませぬ」

政醇「余は平気じゃ」

相馬「殿様が平気でも我々が恐れ多いのです。先祖代々、湯長谷藩に使えてきました誇りが……」

相馬、長口上になりそうな雰囲気。

政醇、それをさえぎって、

政醇「わかった、わかった。言うとおりにする。それ以上、申すな」

相馬「我らのことなら心配いりませぬ。江戸までの道案内に詳しいものを見つけましたゆえ……。段蔵、入れ」

段蔵の声「もう入っております」

相馬「なに！」

相馬がふと横を見ると、段蔵が控えている。

相馬「お主、いつの間に!？」

段蔵「拙者は戸隠流の忍び、雲隠段蔵。雲のように、好きなき、好きなきところに現れまする」

政醇「ほう……。面白きやつ」

相馬「段蔵。おごったことを言うわりには、約束の刻限より、半時も遅れたのはなぜじや?」

段蔵「それは……。心気を澄まさねば、十分な術も使えませんからな」

段蔵、胸を張る。

○湯長谷城近くの道(夜)

地図を持ってしている町人Aと、町人B。

町人A「それでな、その野郎(段蔵)がよ、泣きそうな顔で聞くわけよ。これ(地図)を見せて、湯長谷城はどこかってな」

町人B「まさか、ここですか?」

町人A「笑いをこらえながら)。そうそう!

だから言ってやったんだ。『そりゃよう、お前の目の前にあるぜ!』ってな」

町人B「ぶっ!」

町人A「ありゃあ、方角のわかんねえ奴だな。かえーそーに」

町人Aと町人B、笑い合う。

○湯長谷城・中(夜)

政醇、相馬、段蔵。

段蔵「(嘘をついて)山中の滝に打たれ、すっかり気迫も満ち申した」

政醇「さようか。それは頼もしいのう」

政醇、感嘆した様子。

相馬「だがらとって、刻限に遅れるのは困る。以後、気をつけてくれぬか」

段蔵「心得申した」

政醇「それで段蔵よ。お前は江戸までの抜け道を知っておるのじゃな?」

段蔵「知っておるどころではございませぬ。

東国は、我が戸隠流の、庭のようなもの。

獣道にいたるまで熟知しておりますわ。は

っはっは!」

自信満々のふりをしている段蔵。

相馬「殿。段蔵は、年老いたるものの戸隠の高名な忍者で、かつてその腕は東国一とう

たわれたほどでござりまする。まずは安心

かと……」

政醇「よし。こたびは我が藩の生き死にかかかっておる。しっかり頼むぞ、段蔵」

段蔵「お任せください」

相馬「それで江戸までは何日かかるのだ?」

段蔵「急げば、まず五日……」

政醇「五日とな! 常の参勤交代では、八日はかかるぞ」

段蔵「足の丈夫なものを集めて、全力で駆けるのでござる。もちろん、荷物をできるだけ軽くする工夫が必要でござるな」

相馬「むう……。しかし、仮に五日なら費用は……」

相馬がふところから算盤を取り出し、パ

チパチとはじく。

相馬「おお……！ 往復しても140両で済むではないか！」

政醇「成ったな、兼嗣！ それですめば年貢も据え置きじゃ」

相馬「さようでございますな！」

政醇「兼嗣、早速明朝に出立するぞ。人選と中間の手配をすませておけ」

相馬「はっ！ 口入れ屋に話はついております」

政醇「段蔵、お主も頼むぞ……むっ！？」

段蔵の姿はなかった。

かわりに、畳には、白梅の花の細い小枝が刺さっている。

政醇「これはいつの間に……」

相馬「むむ。畳に穴をあけおって！」

相馬、小枝を抜いて、畳をこする。

政醇「潔癖よのう、おぬしは……。しかし、

段蔵。不思議なやつじゃ」

○湯長谷城の前(夜)

編み笠をかぶった不気味な二人組(公儀隠密Aと公儀隠密B)が、館を伺っている。

城は遅くまで明かりがついており、準備が忙しい。

○山中(夜)

焚き火している段蔵。

必死に牛久宿までの地図Bを見ている。

段蔵「よし。この道なら知っている……」

段蔵、地図を穴の開くほど見ている。

○湯長谷城の前(早朝)

相馬と段蔵と家来たち。

大名行列の道具——長持ち、駕籠などが並んでいる。

ガタガタと準備している家来たち。

相馬「おのおの方、良いか。荷物は何も入れてはならぬ。また、刀はここにあるものを

使ってくれ」

相馬、長持ちに入った刀や槍を指し示す。
家来たち近づいてきて、家来Aが刀の一本をとる。

家来A「ん？ 妙に軽いのう……」

家来A、刀を抜く。

家来A「こ、これは！ 竹光ではござらぬか！」

家来Bも手に取った槍の先の覆いを取る
と、穂先はなかった。

家来B「槍先もない！」

段蔵「いかにも。普通の刀や槍では重すぎて、道中、速く走れまい。持ち物はできるだけ軽くするのが。駕籠や長持ちは行く先々で借りることになっておる」

家来A「むう……。武士の命を……」

相馬「参勤交代できねば、お取り潰しじゃ。

妻子を路頭に迷わせたいか？」

家来B「無念……」

太っている家来Cが口を出す。

家来C「ご家老。食料はどういたしますか？」

相馬「水は川にて汲み、食料は山で猪や兔を狩るのじゃ」

家来C「行く先々で調達するのですか！？」

ざわめく家来たち。

相馬「心配するな。段蔵が道の案内人じゃ。

山での猟も差配してくれる」

段蔵、小さくうなづく。

家来A「そうは言うても、その者は老いぼれではないか？」

段蔵「(無感動に)空を見てみよ」

一同が見上げると、空には雁が六羽、飛んでいる。

段蔵、黙って、空に手裏剣を投げる。

落ちてくる六羽の雁。

家来たち「おお……」

段蔵「山でひもじい思いをしたくなかったら、拙者の言うことを聞くのだな」

家来たち、段蔵を尊敬の目で見直す。

相馬「用意が整うたら、各自、門の前に集ま

るのじゃ！」

家来たち「はっ！」

家来たち、竹光を手に取り、準備にかか
る。

○湯長谷城・中(朝)

政醇、参勤交代用の着物をきている。

側女Bが着替えを手伝っている。

側女B「奥方さまは、さぞお喜びに……」

政醇「さようかな……」

側女B「え？」

政醇「あれは、江戸暮らしですっかり変わっ
てしまった。磐城のことなど忘れておる」

側女B「そんな……」

政醇「ここはもう、奥にとっては不自由な暮
らしよ」

側女B「しかし、妹様もいらっしやいますし」

政醇「おお、琴か。確かにあやつは、国に帰
りたがっておるの」

政醇、微笑む。

側女B「琴さまのこと、思い出します。殿様
と二人並ぶと、見分けがつかぬほど似てお
られて……」

政醇「しかし、あれはおてんばでな。余も、
よういじめられたわ」

政醇、笑う。

○湯長谷城・玄関

15人の小規模な大名行列が整列してい
る。

政醇や相馬、そして武士の姿に化けた段
蔵がいる。

政醇「こたびの参勤交代は過酷なものになる。
しかしこれも藩の存亡に関わることで、
仕様がな。精一杯急いでくれ」

家来A「はっ！」

家来B「しかし我々は良いとして、相馬殿は
大丈夫でござるか？」

相馬「侮るな、若造が！ 年はとつても無外
流免許皆伝の腕前。若いものには負けはせ

ん！」

相馬、まなじりを上げる。

家来B「これはいらん心配でござったな」

家来B、頭を下げる。

政醇「ふふ、そう気張るな、兼嗣。疲れたら誰かに声をかけておぶうてもらえ」

政醇、馬に乗る。

段蔵、それを見て、

段蔵「殿様。駕籠には乗らんのでござるか？」

政醇「余は駕籠が嫌いなのじゃ。中には菊千代が乗っておる」

段蔵「菊千代？」

政醇「笑って）見せてやれ」

家来A「はっ！」

家来A、駕籠を開けると、中には猿がいる。

段蔵「猿！？」

政醇「余の飼ひ猿じゃ。よくなつておるぞ。

これ、菊千代」

政醇が呼びかけると、猿がはしゃぐ。

政醇「どうじゃ。愛嬌があるう？」

政醇、段蔵に向かって満面の笑み。

段蔵「ま、まあ、そうでござるな……」

政醇「では出立いたすぞ。一同、立ちませい！」

家来たち「おう！」

少人数ながらも見事な立ち居ぶるまいで行進する一同。

○畑のそばの道

広いあぜ道を行列が行進している。

太い大根を持った百姓A、馬上の政醇を見つめる。

百姓A「殿様〜！ 今年は良いのがとれましてだ！」

百姓A、大根を見せる。

段蔵「殿に向かって、無礼な！」

困惑する段蔵。

相馬「良いのじゃ。我らが殿様は、民と仲良うてな」

相馬、微笑む。

政醇「おう茂吉！ せいがでるのう。今年も

うまい漬物を食わせてくれ」

百姓A「へえ！ ウチのババアに漬けさせて
持って行きますよう！」

百姓A、嬉しそう。

百姓B「殿様く！ また江戸に行くのけえ？」

他の田畑でも、次々と百姓たちが殿様に
声をかける。

○道の脇の草陰

行列を尾行している公儀隠密の二人。

隠密Aはこわもてで、隠密Bは、男だが、
女のような物腰。

隠密A「かなり少ないな」

隠密B「フフ、あれでは行列というより、家
族連れの旅ですね」

隠密A「しかしこれだと、江戸まで無事に、

たどり着いてしまうかもしれん」

隠密B「そうならぬためにも、我らがいるの
でしよう？」

隠密B、微笑む。

隠密A「まことに」

隠密A、陰険に笑い返す。

隠密B「ところで一人、忍びがいますね」

隠密A「あの先頭の男だろう？ 足運びが違
う」

隠密B「一応警戒しておきましょう」

隠密A「まあ、我らに勝てる者がいるとも思
えぬが……」

二人、木陰に消える。

○街道

遠くに常陸の国の町が見える。

行列がとまっている。

相馬「さてもうすぐ一度目の行列じゃ。気張
らぬと行かんぞ」

家来たち「はっ！」

段蔵「おい。来たようだ」

段蔵が指差す方向から、渡り中間(ちゅ

うげん)たちがやってくる。みな、大名行列の格好で50人ほど。

渡り中間A「相馬殿はおられるか」

相馬「ご苦労でござった。拙者でござる」

渡り中間A、行列を見て、

渡り中間A「ずいぶんと少のうござるな」

相馬「我らは小藩にてな。このくらいでちよ
うど良いのじゃ」

渡り中間A「しかし、本体より我らの方が多
いではないか」

相馬「諸般の都合でござる」

渡り中間A「まあ、金をもらえれば文句はな
いが……」

相馬「(領き)段取りを説明したい。実は……」

相馬、絵図を取り出して説明する。

相馬「こう歩みを繰り返してじゃな……」

渡り中間A「こ、こんなことをするのでござ
るか！」

渡り中間A、驚いている。

○常陸の国・高萩宿

T「高萩宿」

二列縦隊の立派な行列が街を進む。

家来A「下に、下に(参勤交代で「下に

」)と言っているのは徳川御三家のみであ
るが、ここでは一般に知られているかけ声
を用いる」

町人たちが脇でひれ伏し、行列を見る。

町人A「湯長谷藩の殿様か？」

町人B「なかなか立派じゃのう」

町人C「途切れぬ行列を見るのがまた楽しい
なあ」

行列が進んでいく。

行列の先頭のほうが、家の途切れた四つ
角に来ると、素早く左右に列ずつ分か
れて曲がっていく。俯瞰で見ると、二筋
に分かれる噴水のように見える。

相馬、分かれる間際、片側の列にいる渡
り中間Aに話しかける。

相馬「先ほどの話どおりに！」

段蔵、ふところから、こぶし大の黒い玉を出して見せる。

相馬「大丈夫じゃ。殿を見ておれ」

馬上の政醇の頬が、もごもごと動く。

政醇「(腹話術で口を動かさずに)風邪で容態がすぐれませぬ。顔を出さずに失礼仕る。

徳川様こそ、ご機嫌うるわしゅう」

段蔵、驚いて政醇を見ている。

段蔵「(小声で)あれは山彦(やまびこ)の術！」

相馬、段蔵に頷く。

宗翰「さようでござるか。ではさらば。道中気をつけられよ」

宗翰が自分の駕籠の窓を閉めようとする。ホッとする相馬。

しかし窓が閉められる寸前、政醇の駕籠の中の猿がキイツと鳴く。

宗翰「何ごとじゃ!？」

宗翰、再び窓を開ける。

緊張する政醇。

とっさに相馬が、ごまかすために、猿舞いを踊り出す。

相馬「キキッ! キイツ!」

宗翰「な、何と!」

相馬「実は、国許では猿舞いが流行っておりまして……。この舞は幸運を呼ぶといいますが。宗翰様に良き運が来たりますよう、舞わせていただきました。ほれ、このように」

相馬、再び舞う。

こっけいな姿に段蔵が思わず噴き出す。

つられて宗翰も笑う。

家来たちも、いつも真面目な相馬が猿のように舞うのを見て、笑ってしまふ。

見物していた町民たちも腹を抱えて、笑っていた。

相馬、舞を終える。

宗翰「ふむ。面白かったぞ」

相馬「お目汚しでござった……」

相馬、頭を下げる。

宗翰、笑って窓を閉じる。

宗翰の一行が去っていく。

相馬「ふう……。なんとかなったの」
汗を拭きつつ、まじめな顔をする相馬に、
家来たちがまた大笑いする。

相馬「と、殿……」

相馬、救いを求めるように政醇を見る。

政醇、相馬に背中を向けている。

政醇「大儀で……あつた……」

政醇、肩が震えている。

相馬「殿まで……！ ひどうござる、むしろ
我慢せずに笑うてくだされ！」

政醇、振り向き、まじめな顔で、

政醇「いや、ほんとに相済まなかった」

政醇、後ろ手で尻をつねっている。

段蔵「笑いながら）まあまあ、無事に済んで
良かったではないか。殿様も山彦の術まで
使われるとは驚き申した。我ら忍びでも、
口を動かさずにあそこまで声を使うのは難
しゅうござるぞ」

政醇「ほう、あれは山彦の術というのか。何
度かこういう目にあつておるのでな。自然
に会得したわ(苦笑する)」
行列は再び歩き出す。
行列は歓声を上げる町民に見送られ、町
を出て行く。

○同・町外れ・山のふもと

歩みを止める行列。

相馬と渡り中間A。

馬上には政醇。

相馬「それではご苦労でござった」

相馬、賃金を渡す。

渡り中間A「道中、お気をつけめされい」

渡り中間たち、去っていく。

相馬「ふう、なんとかうまくいきましたな」

政醇「……」

相馬「殿？」

政醇、暗い顔をしている。

政醇「やはり見栄を張るのは気が進まんの」

相馬「……これも方便でござります」

政醇「……わかつておる。むしろ苦労させた

お主たちの方が腹も立っておろう」

相馬「滅相もない……」

政醇「こんな嘘をつかねばならぬのも、ご老中のくだらぬ企みのせい……。なんとしても一言いわねばならぬ！」

政醇、怒り顔。

相馬、黙って頭を下げる。

一同は、動きやすい着物に着替えている。

段蔵「さあ、ここから山に入ります。覚悟はよろしいか？」

相馬「準備はできておる。はよう案内いたせ」

段蔵「では、お遅れめさるな！」

段蔵、山へと走りこんでいく。

相馬「続けい！」

一同も山に突入する。

○山中

一同、走っているが、慣れぬ山道で多くの者が転ぶ。

段蔵「足元のつる草をよく見極めよ！」

相馬「(死に物狂いで)段蔵、速すぎるのではないか？」

段蔵『刻限に遅れるは武士の恥』と言ったのはおぬしではないか」

相馬「しかし……」

段蔵「これでも手加減しておる。おぬし、無外流の免許皆伝と言っておったではないか」

相馬「山で戦う修行はしておらぬ！」

段蔵「では、今からなされるのだな」

段蔵、皮肉に笑って、足を緩めずに走りつつ、後ろに叫ぶ。

段蔵「熊笹には入るな。手足を切ってしまうぞ。兎や猪を見つけたら捕らえよ。それが

道中の飯になる！」

段蔵、飛ぶように走る。

政醇たちも必死についていく。

一同、ぼろぼろになりながら走る。

○原っぱ(夕方)

一同、疲れ果てて寝転がっている。

段蔵「よし。獲物をとってきたものはいるか？」

誰も名乗り出ない。

政醇がリスの屍骸を段蔵に見せる。

政醇「なんとかこれだけじゃ」

段蔵「さすがは殿様。しかしこれだけでは腹はふくれぬ……」

段蔵は背中に担いだ袋をドサツと草の上に放り出す。

袋からは兎、キジ、蛇、山菜、長芋などが転がり出る。

相馬「こ、これは……。いつの間に！」

段蔵「おぬしらを待っているのが退屈だな。

片手間に獲っておったのよ」

政醇「ふむ。噂どおり腕がたつな、そこもとは」

段蔵「雇われたからには、勤めは果たし申す」

相馬「殿。少しだけ酒を用意してあります。

今日のぶんだけです」

相馬、大き目のひょうたんを見せる。

政醇「ほう……。気が利くな、兼嗣」

政醇、笑う。

一同のほうを向いて、

政醇「皆の者、今日は大儀であった！ おかげで十四里をすすむことができた。ここに

酒がある。少しだが、飲んでくれい！」

家来たちから歓声上がる。

× × ×

焚き火で獲物が焼けている。

みな、酒を飲んでゐる。猿もはしゃぐ。

政醇「さあ、段蔵。遠慮せずに飲め」

段蔵「……」

段蔵、熱っぽい目で酒を見、震える手を杯に伸ばしかけるが、手を引つ込める。

相馬「いかがでした。殿の思し召しなるぞ」

段蔵「……拙者、故あって、酒を断っております」

政醇「ほう……」

段蔵「ひらに、ご容赦を」

相馬「愚か者！ そのようなことで、お役目

が務まると思うてか！」

段蔵「……」

政醇「(笑って)まあ待て兼嗣。気の進まぬものを無理に飲まずでない」

段蔵、おどろいて政醇を見る。

段蔵「なるほど……。磐城への道中、政醇様は名君とおうわさを聞きましたが……」

段蔵、頭を下げる。

政醇「なあに。余とて、苦手なものはある」

政醇、やや苦笑する。

○原っぱ近くの林(夕方)

公儀隠密の二人が一行を見張っている。

隠密A「どこでやる？」

隠密B「そうですね。ここは水戸藩のお膝元、場所が悪い。常陸の国を出てからでよいのではないですか」

隠密A、ふと何かの気配に気づき、クナイ(棒手裏剣)を投げる。

キン！と音がして暗闇から段蔵が現れる。

隠密A「何奴！」

段蔵「それはこちらの言うことじゃ。ま、あわてるな」

段蔵、自分の隠器(針のような武器)で受け止めたクナイを見る。

段蔵「このクナイ……服部の手のものか。さしづめ、公儀隠密であろう。目的は足止めか？」

隠密B、サツと動いて段蔵を挟み込む。

段蔵「あわてるなと言うておろう。お主らが磐城からつけてきたのは知っておる。狙う獲物は同じじゃ」

隠密B「……なに？」

段蔵「ワシは牛久宿まで行ければ良い。そこで金をもらうことになっておるからな。後は知らぬ」

隠密A「本当か？」

段蔵「左様さ。あやつら、お人好しすぎて反吐が出るわ。いい気なものよ。ふっ」

段蔵、鼻で笑う。

段蔵「ま、しかし、牛久までは手を出すな。
ワシの名は雲隠段蔵。噂くらいは聞いてお
ろう」

隠密B「雲隠……？ まさかあの、戸隠流の
抜け忍！？」

隠密A「確か、甲賀の頭・鵜飼鬼丸(うかい
おにまる)を倒したという……」

段蔵、苦い表情を浮かべる。

段蔵「争いは無用。ワシがいなくなるまで、
手出しせず、ついて参れ」

段蔵、闇に消える。

隠密A「しかしあやつ、噂では酒に溺れ、す
っかり老いたとの話もあるが」

隠密B「だが今の技、並の者ではありません
……。確実に仕留められる時が来るまで待
ちましょう」

隠密A「江戸に報告しておくか……」

隠密A、懐より伝書鳩を取り出し、夜空
に放つ。

○原っぱ(夜)

政醇の一行、宴の後。

相馬、馬を引いてくる。

相馬「政醇様、ここからは早馬で街道を先に
お進みくださいませ。待ち合わせるのは牛
久宿の鶴屋という宿でございます」

政醇、浮かぬ顔。

政醇「余だけ楽をするのか」

相馬「(微笑んで)早馬はかなり尻を傷めると
聞きます。楽な旅ではありませんぞ」

政醇「ふん。わかっておるわ」

政醇、酒を飲み干す。

相馬「道中は浪人姿でお行きくださいませ。
身分が明らかになるとまずいですからな」

政醇「わかっておる」

段蔵、帰ってくる。

家来A「段蔵、遅かったのう！」

家来B「わかった、糞であろう！」

家来C「かなり長かったな。大糞に違いない」

家来たち、すっかり出来上がって、びろ

うな話で盛り上がっている。

段蔵「そうよ。大とぐるを巻いておった」

家来たち、笑う。

家来A「何せ、蛇を食ったものなあ！」

家来B「わあっはっはっは！」

家来C「しかし良い仲間を得たものじゃ！」

段蔵「戸惑って仲間、と？」

家来A「そのことよ。我ら、もう仲間であるう。おぬし、これが終わらば、磐城で暮らさぬか？ 無宿人なのであろう？」

段蔵「……(微笑)」

家来B「その年ではそろそろ体もつらからう。なんなら嫁を世話してもいい」

家来C「段蔵殿に似合う年なら、しわくちやの婆であるうがの！」

家来B「何を。叔母は、まだかくしゃくとしておるわ！」

家来A「お、おぬし、まさか段蔵殿といとこになるつもりか？」

家来B「かまわぬ。なんせ叔母は、後家といえどもまだ汁が残っておってな」

家来C「ほんとうは、お前が狙われておるのではないか？」

家来B「ば、馬鹿を申せ！」

家来A「わあっはっはっは！」

段蔵、下を向いて苦笑している。

浪人姿になった政醇、近づいてくる。

政醇「段蔵、道中、皆を頼むぞ」

段蔵「はっ」

政醇、家紋付の立派な懐刀を取り出す。

政醇「これは内藤家に伝わる家宝でな。これを心づけとしてもらっておいてくれ。本当は錢をやりたいのだが、既に出しつくしてしまつてな」

段蔵「(驚いて)しかし家宝なのは……」

政醇「こんなものより、民のことじゃ。磐城が他藩のものになれば、年貢も高くなるう。国の存亡はお主にかかっておる。頼んだぞ」
政醇、頭を下げる。

段蔵「もったいない……」

政醇「いずれまた酒を……いや、おぬしは飲まぬのであったな。共に白玉でも食おうか」

政醇、笑って歩いていき、馬に乗る。

政醇「皆のもの、牛久で待っておるぞ！」

一同「ははあっ！」

政醇、馬で駆けていく。

段蔵、懐刀を見つめる。

段蔵「ワシは心を持たぬ忍びぞ。人を信じるのも大概にせい……」

段蔵、鼻を鳴らす。

○江戸城・信祝の居室

松平信祝、すり鉢で緑色の(九官鳥用の)

エサをすり、作っている。

脇の竹籠の中に九官鳥がいる。

信祝、エサをへらで九官鳥に与える。

信祝「お前、だいぶ肥えたのう……」

信祝、目を細めている。

夜叉丸の声「(天井からの声)信祝さま、報告が入りました」

信祝「……。入れ」

夜叉丸、天井から降りてくる。

夜叉丸「湯長谷藩の行列は、常陸に入り、河

尻で野宿をしております」

信祝「河尻だと？ 早いな」

夜叉丸「それが貴奴ら、山中を近道して走っておるよう……」

信祝「貧乏大名め……。こしゃくな！」

夜叉丸「このぶんでは、江戸への到着は五日以内と見ました」

信祝「足止めはできるのであろう？」

夜叉丸「それが、案内人に手ごわい忍びがついておりまして……。雲隠段蔵という手だ

れの忍びです」

九官鳥「(鳴く)コロセ！」

夜叉丸「！」

信祝「お前はえらい奴じゃのう」

信祝、九官鳥を撫で、竹籠を閉める。

信祝「たかが田舎侍。邪魔するなら、お前たちお庭番も加勢せよ。そちらにも甲賀の手

だれがおるであろう」

夜叉丸「……御意。なんとしても行列は止め、お取りつぶしに……」

信祝「ぬかりなくやれ。ゴミはおとなく滅べばよいのじゃ！」

九官鳥「(鳴く)コロセ！」

夜叉丸「御意」

夜叉丸、跳んで天井裏に消える。

○山中・獣道

藪こぎして、走っている湯長谷藩一行。

相馬は最後尾にいて疲れ気味。

一行の前方の茂みが怪しくゆれている。

段蔵「この山を越えれば霞ヶ浦でござる」

家来A「おう！」

家来B「だいぶ足も慣れてきたわ」

家来C「わしもきのこを採ってきた！」

段蔵「(淡々と)それは毒きのこでござる」

家来C「まことか！」

家来A「(笑いまじりに)貴様、我らに何を食わせるつもりだ！」

家来B「見分けがつかぬなら、せめて竹の子にせよ！」

家来C「ぐっ……」

そのとき、一堂の前に突然熊が現れる。

立ち上がって吠え、威嚇する熊。

家来A「うわあっ！」

段蔵「構うな！ 先を急げ！」

家来B「わかった！」

家来C「これでも食らえ！」

家来Cの投げた毒キノコが熊の目にあたる。熊、びっくりするが、やがて毒キノコを食べ始める。

家来C「(振り向き)ふふ、狙いどおり！ わ

しは最初から熊を退治するためにと……」

家来A「嘘を申せ！」

家来A、走りながらマムシをつかむ。

家来A「段蔵殿、これは食えるのか？」

段蔵「美味だぞ。しかし、おぬしら、なかなか良い腕前だな」

家来 B 「ふふん。政醇様をはじめ、我ら湯長谷藩士は武芸百般を極めておる。他藩の着膨れた武士のような醜態は見せん」

家来たち、走っていく。

少し遅れて相馬がやってきて、酔っ払ったようになっている熊を見つける。

相馬「おお、これは！」

相馬、懐からそろばんを取り出してはじく。

相馬「毛皮と肝を取れば八百文にはなるが……。しかし今は先を急ぐ。無念！」

相馬、悔しそうにそろばんをしまい、前方の一行を追いかける。

○江戸時代の日本地図

江戸時代の日本地図。

N「徐々に山にも慣れ、走り続けた湯長谷藩の一行は、無事高萩を抜け、その旅を全速力ですすめていった」

赤線で水戸街道の、土浦あたりまでの道のりが表示される。

○牛久宿・鶴屋・外

T「牛久宿」

鶴屋の看板。

浪人姿で馬に乗っている政醇、旅籠の鶴屋につく。

政醇「ここじゃな」

政醇、馬を降り、中に入っていく。

○同・鶴屋・中

部屋で布団に寝転び、馬の長旅で痛んだ尻を撫でている政醇。

政醇「む……。確かに痛む……」

障子が開いて、年取った仲居が、茶道具を持って入ってきて、茶を淹れつつ、

仲居「おや、ご浪人様。尻が痛むですか？ あ

んま、呼んでやろうか？」

政醇「いや、良い」

仲居「そうか。(いやらしく笑って)やっぱり

あつちかい？ この宿には良い飯盛り女が
おりますでなあ。その時は言うてください」

政醇「飯盛り？ この宿では飯をよそうてく
れる女子(おなご)がおるのか？」

仲居「ぶーっ！ いやだよ、このご浪人さん
は！ てんごう(元談)ばかり」

政醇「ん？」

仲居「これだよお。(親指を人差し指と中指
の間に挟む)。この客はみんなそれを楽
しみにしてくるのさ。良い女子をそろえて
るからねえ」

政醇「(理解して)ううむ……。さようか」

仲居「それともあんた、男がいいのかい？

そっちも呼べるけどね……」

政醇「断る。拙者、色を断っておつてな」

仲居「あんたまさか……。 (政醇の股間を見
つめて)若いのに気の毒に……」

仲居、悲しそうな顔で出て行く。

政醇「苦笑しながら)ふむ。市井(しせい)も
なかなか面白いものよ……。むっ」

政醇、腹を押さえて立ち上がり、外の廊
下にする。

○同・廊下

誰もいない廊下。

女中の声「きゃああっ！」

女中、走ってくる。

政醇もふんどし姿で追いかけてくる。

政醇「すまぬ！ 扉が苦手なのじゃ！」

女中「こないで！」

女中、逃げる。

政醇「困ったのう……。城のように、廁を開
け放すわけにはいかぬしな。外に行くしか
ないのか」

政醇、着物を直し、縁側の草履をはいて、
庭に出る。

旅籠の母屋の角を曲がると、お咲(18)
が色っぽい襦袢姿で、荒縄で木に両手を
吊るように縛られている。

政醇「ん？ おぬしは？」

お咲「けっ！」

お咲、つばを吐く。

政醇「折檻でも受けておるのか？」

お咲「呆け面しやがって。大きなお世話だ！」

政醇「呆け面……。左様か」

政醇、きびすを返し、帰っていく。

お咲「ちよ、ちよっと！ ……なんだい、甲

斐性のない侍め」

お咲、縛られた手首を見て顔をしかめる。

手首からは薄く血が流れている。

○同・部屋(夕方)

湯上りの政醇、浴衣で酒を飲んでいる。

仲居、夕膳を運んでくる。

仲居「疲れは取れたかね、ご浪人さん」

政醇「うむ。良い湯であったわ」

仲居「そりゃあよかった。ウチの湯は切り傷

や腰痛なんかによく効くんだから」

政醇「そうらしいな。おかげで尻の痛みも引

いた。ところで……」

仲居「なんだね？」

政醇「庭に縛られている女はなんだ？」

仲居「庭に……。ああ、お咲だね」

政醇「折檻でもされているのか？」

仲居「あの子はねえ、嫌な客につくと、態度

が悪いんだよ。昨日も上客を怒らせちまつ

てねえ……。山猫みたいな子だよ」

政醇「ふふ」

仲居「どうしたんだい、浪人さん？」

政醇「今宵、そのお咲とやらを呼んでくれぬ

か」

仲居「あれまあ。よりによってあの子を！

ふふ、そうかい、そんな好みかい。浪人さ

んもまじめそうなのに、好きだねえ(下卑

た笑い)」

政醇「……(赤面している)」

仲居「わかったよ。これであの子も放しても

らえるってもんだ。蹴飛ばされないように

お気をつけて」

仲居、笑いを浮かべながら出て行く。

政醇、苦笑して猪口に手酌で酒を注ぐ。

○原っぱ(夜)

疲れで眠りこけている湯長谷藩一行。
大名行列用の長持ちや駕籠が見える。
段蔵、むくりと身を起こし、懐から胴巻
きを取り出す。

段蔵「甘いのう……。旅の最初に半金、そして旅が終わってから残りの半金を払うのが常であろうが」

家来たち、無邪気にいびきをかいている。

段蔵「ま、これをもらえばもう用はない」

ガチャツと、銭の金属音がする。

相馬の目が、銭の音で一瞬開くが、眠気に負け、再び目を閉じる。

段蔵、銭を仕舞い、一人頷いて走り出す。

段蔵「(小声で)さらば！」

段蔵、振り向かない。

× × ×

そばに潜んでいた公儀隠密の二人、立ち上がる。

○山中(夜)

猿のように木々を飛んで急ぐ段蔵。

○山中の村(夜)

段蔵、地図を見ながら、村に下りていく。

一軒の家の前で立ち止まる。

段蔵「ここか……」

○同・お松の家(夜)

段蔵、眠っているお松(30)と、娘のお美代(7)に近づき、お松の耳元でささやく。

段蔵「お松……。お松……」

お松、目を覚ます。

お松「お、お前さん！」

段蔵「お松……。涙ぐむ」

お松「何しにきたんだい。帰っとくれ！」

お松、冷たく背中を向ける。

段蔵「そうだ。お前が怒るのはもつともだ」

お松「……」

段蔵「もう酒はやめた。ほんとだ」

お松「その言葉は何回も聞いたよ」

段蔵「本当だ。胃の腑に毒を盛った。酒を飲むと死ぬ薬だ。戸隠流の秘伝の術なのだ」

お松「……」

段蔵「酒をやめたら、ワシがいかにかにひどいことをしたか、身にしてみたのだ……」

お松「そうだよ！ これを見な」

お松、起き上がって、灯明を入れ、お美代の顔を照らす。左目のまわりに深い傷がある。

お松「あんたに殴られて、片目はもう見えな
いんだ。いまさら酒をやめたって、あんた
の罪が消えるとも思ってたのかい！？」

お美代、起きそうになって身じろぎする。

お松「お美代はあんたのことを覚えてないん
だ。これ以上、邪魔をしないでおくれ！」

段蔵「わかっておる、わかっておる！ 今日
はただ、渡したいものがあつただけだ。親
子二人では何かと金も心細かろう」

段蔵、胴巻きを床に、ごとっと置く。

お松「……」

段蔵「心配するな。二度と現れぬ。本当にす
まなかった」

段蔵、土下座し、そして立ち上がる。

お松「あんたが土下座なんて……。はじめて
見たよ。……待って」

お松、お美代を起こす。

お美代「ん……。おつかさん……。？」

お松「親戚のおじさんが急に訪ねてきてね。
もう帰るって言うから、ご挨拶なさい」

お美代「目をこすりながら可愛くこんばん
は、おじちゃん」

段蔵「お……。おみ……。言葉をとめ、頷く」

お美代「どうしたの？」

段蔵「ちよ、ちよっと頭が痛くてな……」

段蔵、目を押さえている。

お美代「大丈夫？」

段蔵「ああ」

段蔵、目を拭く。

お美代「はい、これ！」

段蔵、目を開けると、お美代が赤い折鶴を差し出している。

お美代「あげる！ お守り」

段蔵「お、おう……。ありがとうよ」

段蔵、折鶴を受け取って、むせぶ。

お美代「おじちゃん、さびしそう……。ねえ、おじちゃん。仲良しはいるの？」

段蔵「……。ああ、おるとも」

お美代「良かった！ お美代もやっと仲良し
ができたんだよ。一人はさびしいもんね」

段蔵「そうじゃな。お美代……。ちゃんも、た
くさん友達をつくるのじゃぞ」

お美代「うん！」

段蔵、折鶴を懐にしまい、苦しみで背を
向けつつ、立ち上がる。

段蔵「では、さらばだ」

お美代「さよなら、おじちゃん！」

段蔵、身を震わせ、外に出る。

お松、戸口までついてくる。

お松「最近、このあたりには浪人崩れの山賊
が出ます」

段蔵「なに？」

お松「道中お気をつけて」

段蔵「戸を見つめ）すまぬ……」

段蔵、振り返らずに走り出る。

○山中(夜)

山を咆哮しながら走る段蔵。

段蔵「お松う！ お美代お！」

熊笹に飛び込み、笹の葉に当たるにまか
せ、顔や手足は傷だらけになる。

段蔵「二度と会えぬ！ 二度と会えぬ！」

段蔵、山肌で倒れ、仰向けに転がる。

空には月。

お美代の声「仲良しはいるの？」

段蔵、吼える。

段蔵「おらぬ！ お前たち以外に、わしには
誰もおらぬのじゃ！」

段蔵、目を腕で押さえて泣く。

政醇の家来Cの声「しかし我ら、良い仲間を得たものじゃ！」

段蔵、ふと目を開ける。

○(回想)原っぱ

段蔵と政醇、そして家来たち。

家来C「しかし我ら、良い仲間を得たものじゃ！」

段蔵「戸惑って(仲間、と?)」

家来A「そのことよ。我ら、もう仲間であるう。おぬし、これが終わらば、磐城で暮らさぬか? 無宿人なのであるう?」

段蔵「……(微笑)」

家来B「その年ではそろそろ体もつらからう……」

× × ×

政醇「こんなものより、民のことじゃ。磐城

が他藩のものになれば、年貢も高くなるう。国の存亡はお主にかかっておる。頼んだぞ」

政醇、頭を下げる。

段蔵「もったいない……」

政醇「いずれまた酒を……いや、おぬしは飲まぬのであったな。白玉でも食おうか」

政醇の笑顔。

○元の山中(夜)

あお向けで月を見ている段蔵。

段蔵「ふん。馬鹿どもめ……」

段蔵の頬を、風が撫でている。

段蔵「お美代……」

段蔵、お美代がくれた赤い折鶴を懐から取り出し、見つめる。

段蔵「馬鹿は……わしか!」

段蔵、飛び起き、全力で走り出す。

○原っぱ(夜)

疲れて眠りこけている湯長谷藩一行。

公儀隠密が刀を抜いて、近づいていく。

隠密A「眠っているな」

隠密 B 「段蔵はいないようですね」

隠密 A 「牛久宿は目と鼻の先。もう金はもらったのであろう。全員、殺すか」

隠密 B 「たやすいものです」

二人、笑いを交わす。

隠密 A 「おや、あの音は？」

闇の中に馬蹄の音が響く。

隠密 B 「何奴？」

二人、警戒する。

○牛久宿・鶴屋・政醇の部屋(夜)

政醇、手酌している。

横に煙草盆がある。

お咲が障子を開けて入ってくる。

お咲 「なんだ。あんたか」

お咲、蓮つ葉にどしんと座る。

政醇 「来たか」

お咲 「この助べえ侍が。あんたなんかの相手をするかと思うと涙が出らあ」

政醇 「フフ、威勢が良いな。それなら腕力(かいなぢから)もあろう」

政醇、布団の上に、うつぶせに寝転がる。

政醇 「揉んでくれ。特に肩と腰をな」

お咲 「ふん、はじめは、おとなしくて、後から激しくってやつか。いやらしいね」

お咲、文句を言いながらも、政醇にまたがり、腰を揉み出す。

政醇 「おう……。なかなか、うまいではないか」

お咲 「あんた、めちやくちや凝ってるね。何やって来たんだい？」

政醇 「磐城の国から一日で走り抜けてきてな」

お咲 「馬鹿も休み休み言いな。磐城なんてはるかに北のほうじゃないか」

政醇 「ほう、知っておるのか」

お咲 「あたしはね、陸前から売られてきたんだ。その時の道すがら通ったよ。海がきれいなところだったけどねえ……。でも、あそこだったよ。女衞のやつ、その浜辺で、まだ男の肌も知らないあたしを手籠めにし

やがった。『間引かれないでよかった』だの言いやがってさ。ふざけんじゃないよ。死んだほうがましってもんだ」

政醇「……」

お咲「でもねえ。勝手に死ぬこともできやしない。あたしが死んだら、今度は妹が売られるからね。けっ」

政醇「左様か……」

政醇、悲しそうな顔。

お咲「殿様だ、紀伊国屋文左衛門だって言ってもね、同じ人間なんだよ。糞もすれば女も抱く。それなのに威張りかえって、こっちを下人扱いしやがる！ ふざけんじゃないよ！ あたしには昨日も明日もないんだ。人形みたいに転がって、ただ生きてるだけさ！」

政醇「そうか。苦労したのじゃな……」

お咲、腰をひねり上げる。

政醇「ううっ！」

お咲「あんたみたいな苦労知らずのお子様顔にいわれるとね、よけいに腹が立つよ！

まだ昨日来た助平の方がましさ。知ったよ。うなこと言わなかったからね！」

政醇「そうか……。しまったな、これは」

お咲「一晩中黙ってな。これ以上くだらねえ口、たたくんじゃないよ」

お咲、それでも丁寧に肩を揉む。

その手首には荒縄の痕が、ささくれだっている。

政醇「ちよつと待て」

お咲「またかい？ いちいちめんどくさい男だねえ……」

お咲、手を離す。

政醇、荷物から小壺に入った軟膏を出す。小壺には湯長谷藩の家紋。

政醇、お咲の手をとり、軟膏を塗ってやる。

お咲「ちよ……くすぐったいよ！」

政醇「動くでない！」

お咲「……(すごい力に戸惑って)」

政醇「これでよし。……女子(おなご)の手に
むごいことをする」

政醇、またうつぶせに寝転ぶ。

お咲「おなご……？」

政醇「何をしている。早く続きを揉んでくれ」

お先「は、はい……」

お咲の肩を揉む手の動きが柔らかくなる。

政醇「余……いや、わしもな、幼い頃、今の
家に無理矢理つれてこられたのだよ」

お咲「えっ？」

政醇「不思議に後継ぎに恵まれぬ家だな。養
子としてわしは取られた。実の親から引き
離されてな」

お咲「ふん……」

政醇「朝は暗いうちから、庭に引き出され、
武芸の稽古だ。新しい父は容赦なく、わし
を打ち据えてな。鬼だと思つたわ」

お咲「……」

政醇「新しい母は、事あるごとに、わしを折
檻した。何かと言えば、すぐに押入れに閉
じ込めるのじゃ。二日の間、閉じ込められ
たこともあった。いつ出してもらえるかわ
からなくてなあ。それでわしは狭いところ
が苦手になった……。おかげで今でも廁に
落ち着いて入れん」

お咲「ふん。馬鹿な親だねえ」

政醇「だがな。一日一日と、その日だけはと
思つて暮らしておるうちに慣れた。晴れれ
ば、それは良い日。磐城の海を見られれば、
それは良い日。うまい大根の漬け物を食べ
られれば良い日。小さなことを積み重ねた。
そうするうちに友も出来たのだ」

お咲「……」

政醇「ふふ、今はまた貧乏な我が家が潰れそ
うだな。苦労しておる」

お咲「だったらなんで女なんて呼ぶんだい？」

政醇「はずみじゃ」

政醇、笑つて煙管を吹かす。

お咲「あんた、まさかあたしのために……」

お咲、政醇を見つめる。

政醇「ん？」

お咲「ふっ。まさかね」

お咲、自嘲して揉み終わり、

お咲「……はい！ 終わりだよ」

政醇「うむ！ 良かったぞ。余は満足じゃ！」

お咲、笑いながら政醇の頭をはたく。

お咲「いやだねえ。何、殿様みたいなこと言
ってんだよ、あんた！」

お咲、笑う。

政醇「そうか。わしは素浪人であったわ」

お咲「こんな粗末な着物きて、何が『余は満
足じゃ』だい」

お咲、政醇の口まねをして笑う。

政醇「ふふふ、これはしくじった」

お咲「(ため息)はあ……」

お咲、疲れた様子。

政醇「ご苦労であった。下がって良いぞ」

お咲「えっ？」

政醇「なんだ？」

お咲「あんた、しないのかい？」

政醇「何をだ？」

お咲「決まってるだろう。かっこつけんな」

お咲、帯をとき始める。

政醇「ああ、それか。今日は良い」

お咲「なんだって！ あんた、気は確かい？」

政醇「夜も遅い。わしは眠いのじゃ」

お咲「ま、あんたがそれでいいのなら、あた
しは楽でいいけどさ。やらないって言った
からね！ 取り消しはなしだよ」

政醇「二言はない」

お咲「そっか。じゃあ！」

お咲、うきうきと部屋を出て行く。

政醇「ふふ、相馬たちが走っておるのに、余
だけ良い思いはできんからな」

政醇、煙管をうまそうにふかす。

○同・階段(夜)

ここにこしてお咲が降りてくる。

そこに仲居がくる。

お富「あら、お咲ちゃん。もう帰り？」

お咲「それがさあ、お人好しな浪人でさあ。
笑っちゃった！ 何もしない男なんて初め
てだよ！」

お富「やっぱりねえ……」

お咲「え？ 何よ？」

お富「駄目なんだよ！」

お咲「何が？」

お富「金時様が立ち上がらないんだ」

お咲「うそ……」

お富「たまにいるんだ、ああいう男。ついて

たね、お咲ちゃん！」

お咲「へえ……。かわいそうにねえ……」

お咲、くすくす笑いながら階段の上を見
る。

○同・政醇の部屋(夜)

布団の中で悶々としている政醇。

政醇「ええい、静まれ！ 静まれというに！」

政醇、股間に枕を挟んで苦しむ。

○原っぱ(夜)

眠りこけている湯長谷藩一行のそばに公

儀隠密Aと隠密Bが耳を立てている。

闇の中に馬蹄の音が響く。

隠密A「来た！」

20人ほどの山賊たちが馬に乗ってやっ
てきて、降りてくる。

隠密二人はそれを一行のやや後ろで見て
いる。

隠密B「ほう、これは好都合かもしれません
ね」

隠密A「高みの見物と行くか」

山賊たちがそばに来て、ようやく家来た
ちがのろのろと起きはじめ。

家来A「何やつ！」

山賊A「金目の物を置いていってもらおうか」

相馬、金と聞いて、慌てて飛び起きる。

相馬「金などない。全然ない！」

家来A「(自信満々に)ふはは、我らからは絶

対に金など奪えんぞ！ ないのだからな！」

相馬「長持ちなどを見て）左様。これらは皆、借り物じゃ」

山賊B「黙れ！ 金があるかどうかは俺たちが調べる。おとなしくしている！」

家来B「ふっふっふっふ……」

山賊A「何がおかしい」

家来B「我らは武芸百般を極めし雄藩。そこらの武士道を忘れた野良侍とは違う！」

家来C「我らは一人一人が一騎当千よ！ そのような小人数で来るとは片腹痛いわ！」

山賊たち、腹を立てて、いっせいに刀を抜く。

家来A「飛んで火にいる夏の虫とは、お主たちのことよ！」

政醇の家来たちもいっせいに刀を抜く。

皆、八相や青眼に、堂々と美しく構える。

しかし打ち合いになると、湯長谷藩士の

刀は次々と切り落とされる。

家来たちの刀は竹光だった。

家来たち、呆然と自分たちの刀を見る。

家来A「あっ！」

家来B「しまった！」

山賊A「笑って）かかれ！」

みな打ち合うが、家来たちは、次々と竹光を切り落とされてしまう。

地面に転がる、たくさんの竹の刃先。

山賊B「わあっはっはっは！ うぬらが藩の

侍は、子どものおもちやを腰に差しておるのか！」

山賊B、刃先がなくなった家来Aに斬りつける。

山賊B「死ね！」

目をつぶる家来A。

ギイン！と音がする。

相馬のそろばん（枠が鉄製）が山賊Bの刀を止めている。

家来B「おお！」

家来C「さすが、ご家老のそろばんは東国一

じゃ！」

相馬「馬鹿者！ 早く逃げるのじゃ！」

家来たち、慌てて逃げ出す。

相馬もきびすを返し、逃げながら叫ぶ。

相馬「段蔵！ 段蔵はどこじゃ！ 雲隠れしたか！」

家来たちは一団となって、隠密二人のいるところに逃げてくる。

慌ててそれ避ける二人。

すぐその後を、山賊たちが追ってきて、

隠密たちに斬りかかる。

慌てて抜き合わせる隠密2人。

隠密A「ま、待て！」

隠密B「我らは味方ぞ！」

山賊A「嘘をつけ！ 貴様らなど見たことないわ！」

山賊の一部と隠密たち、戦う。

後ろに残った山賊は残された荷物をあらためる。

しかし長持や箱の中には何も無い。

山賊X「本当に何もないとは……」

山賊Y「こちらも空っぽだ……」

山賊Z、駕籠を見つける。

駕籠から物音がする。

山賊Z「中に、誰かいる」

山賊Z、駕籠に刀を突き刺す。

しかし手応えがない。

山賊Z「……？」

山賊Z、首をかしげて駕籠をあける。

中には猿の菊千代。

山賊Z「おのれっ、変わり身の術か！」

山賊X「くそ、奴らを追えい！」

山賊X、Y、Z、走り出す。

× × ×

逃げている湯長谷一行。

追う山賊。

段蔵の声「忍法・紅雀（べにすずめ）！」

草むらを炎の群れが飛ぶように走る。

ひるむ山賊。

段蔵の顔が炎で照らされる。

相馬「段蔵！ どこに行っておった！」

段蔵「すまぬ！」

段蔵、宙に飛び上がった、手裏剣を投げ、次々と山賊を倒す。

山賊X「おのれ忍びか！」

段蔵「心してかかれ。忍法・毒まむし！」

段蔵、多数の蛇を山賊たちに投げつける。

山賊X「ま、まむし！」

山賊Y「ひいっ！ 毒蛇が！」

山賊Xと山賊Y、絡みつかれて、のたうち回る。

山賊Z「落ち着け！ 縄だ！」

山賊X、はたとまむしを見ると、それは荒縄だった。

山賊X「たばかったか！」

山賊Z「死ねっ！」

山賊Xが段蔵を鋭い羽風で斬るが、段蔵は着物一枚でかわして、返り討ちにする。しかしその瞬間、着物の切れ目から、抜け道の地図を落としてしまう。

段蔵は落としたことに気づかない。

山賊Y「おのれ、乱波(らっぱ)め！」

段蔵「良いのか、お主。まむしには本物も混じっておるぞ」

山賊Yに巻きついているのは、本物のまむしだった。

山賊Y「うわっ！ うわわっ！」

山賊Y、地面を転がる。

しかし山賊の本体が駆けつけてきて苦戦する。

相馬、そろばんで戦いながら、

相馬「武器がのうて困っておった！」

段蔵「よし。煙玉じゃ！」

段蔵、こぶし大の煙玉を懐から出し、山賊たちの前に叩きつける。

段蔵「(大音声で叫ぶ)忍法・雲隠れ！」

山賊たち、思わず身をすくめる。

しかし煙玉はうんともすんとも言わない。

相馬「ん？」

段蔵「不発か！」

相馬、がくっとなる。

山賊、立ち直って襲ってこようとする。

その時、煙玉が爆発し、一面、煙に包まれる。

段蔵「よし！ さ、今のうちじゃ！」
家来たち、逃げる。

○鶴屋・政醇の部屋

政醇、煙管をふかしながら、貧乏揺すり
をしている。

政醇「もう三日。遅い……」

掃除道具を持って入ってくるお咲。

お咲「まだ来ないのかい。そのお仲間って
うのは？」

政醇「左様。どこで道草を食っておるのやら
……」

お咲「ふっ！」

お咲、政醇の股間を盗み見して嘔き出す。

お咲「あんた、きつと苦労したんだねえ……」

政醇「(憮然として)何がじゃ？」

お咲「よし。今晚はあたしがなんとかしてあ
げる」

政醇「ん？」

お咲「あたしだってこの道は長いんだ。腕に
よりをかけてやるよ。楽しみにしときな！」

お咲、かわいくシナを作って出て行く。

○同・同(夜)

政醇、窓の外を見ている。

お咲の声「失礼しますよ」

お咲が膳を持って入ってくる。

珊瑚のかんざしをつけて着飾り、三味線
を弾きながら入ってくる。

政醇「何事じゃ？」

お咲、にやにや嬉しそうに笑う。

そして政醇の前に運ばれてきたのは、鰻
や焼きイモリ、山芋などの精力料理。

政醇「こ、これは？」

お咲「これを食べたら精がつくよ。寝たきり
の爺さんでも飛びついてくるさ！」

政醇「ううむ……」

お咲、箸で鰻を千切り、有無を言わせず、

政醇に食べさせる。

お咲「(し)なだれかかってどうだい？」

政醇「これは……ヘビと似た味だな。うまい」

お咲「あんた、いつもヘビなんか食ってるのかい？ ほんとに貧しいんだねえ……」

お咲、涙ぐむ。

政醇「いや、そういうわけでもないのだが……。大根の漬物など、うまいぞ」

お咲「唯一のご馳走が大根かい！ あんた、食い詰めたのならさ、ここで草履取りでもしなよ。あたしが食わせてやるからさ！」

政醇「ふふ、そうか。かたじけない」

政醇、微笑む。

お咲「別にここが使えなくなつて……」

お咲、政醇の股間に手を伸ばすが、そこに触れて驚く。

お咲「あれえっ！ あんた……すごいじゃないか！」

政醇「いや、まあそのな……」

政醇、頭をかく。

お咲「じゃ、じゃあ、なんであたしを抱かないんだい？」

政醇「それはその、子細があつてだな……」

お咲「ふざけんじゃないよ！」

お咲、箸を叩きつけて立ち上がる。

お咲「あんた、あたしが汚いっていうのかい？ ええっ、そうなんだろう！ 宿場女郎な

んか抱けないってかい？」

政醇「違う」

お咲「だったらなんで抱いてくれないんだ！」

政醇「……(困り顔)」

お咲、政醇の膝に飛び込む。

お咲「あたしやね、女衞に破瓜されてから、今の今まで、一度も好いた人に抱かれたことがないんだ……。ねえ、あんたあたしがそんなに嫌いなのかい！」

お咲、おんおん泣く。

政醇「ふむ……据え膳食わぬは武士の恥か。

ま、一献飲め」

政醇、お咲の杯に酒をついでやると、す

つくと立ち上がり、浴衣を脱ぎさる。
背中が筋肉質で広い。

お咲、向こう側で、政醇のむき出しの股間を見て、目を見開き、杯を手からぼとりと落とす。

お咲「こ、これは……なんてこと……。立派すぎます……。無理かも……」

政醇「許さぬ。覚悟せよ」

政醇、お咲を手荒に押し倒す。

○原っぱ

湯長谷藩一行と段蔵、山賊に壊された駕籠や長持ちを修理している。

家来A「借り物なのに、壊したら大変だ……」

家来A、必死に手入れしている。

相馬、段蔵を見て、

相馬「昨日はどこに行っておったのじゃ！危なく全滅するところであつたぞ！」

段蔵「山賊の根城で戦っておったのだ。襲われそうな気配だったのだな。そう、50人はおつたが全て切つて捨てた。やつらが加わつておつたら逃げきれなかつたであろう」

相馬「感激して」そ、そうだったのか……」

家来A「50人も一人で倒すとは……できるな！」

段蔵「ふん、造作もないことよ」

家来B「お主を殿が召し抱えてくれんかのう」

段蔵「いらぬ世話じゃ。拙者は雲よ。好きなとき、好きなところにいたいのでござる」

家来C「うむ。それも良い生き方でござるなあ」

段蔵「しかし、お主らのように、良い殿に仕えるのもまた幸せよ（しみじみと）」

家来A「まさに。だからなんとしても、こたびの交代は成功させんとならぬ」

相馬「牛久宿はもうすぐじゃ。近道の案内をたのむぞ、段蔵」

段蔵「お任せめされい！」

段蔵、胸を張る。

しかし、ふと一行から離れ、懐の地図を

探るが見当たらない。

段蔵「ない。落としたか？」

段蔵、青ざめる。

段蔵「出たとこ勝負か……」

段蔵、一人頷く。

○林の中の細い道

湯長谷藩の一行、走っている。

相馬「段蔵。本当にこの道で良いのか？」

段蔵「い、いかにも。ここが一番近いはず」

段蔵、額に冷や汗。

家来A「おお、見えたぞ！」

林が途切れ、目の前に大きな道が広がる。

段蔵「よし！」

段蔵、大喜び。

相馬「ん？(訝しがる)」

段蔵「だいぶ進みましたぞ」

子どもが通りかかる。

相馬「おい、子ども。ここはどこじゃ？」

子ども「え？ 藤代宿だよ」

相馬「何！」

段蔵「！」

相馬「段蔵！ 牛久を通り過ぎておるではないか！」

段蔵「これは……手違いでござった。近道を
しすぎたようござる……」

相馬「馬鹿者！ 殿を追い抜いてしまったで
はないか」

段蔵「心配めさるな。拙者がひとつ走り引き
返して連れてくるでござる。おのおの方は
先をお急ぎあれ」

相馬「仕方がない。この先、取手宿では再び
行列を組まねばならぬ。頼んだぞ」

段蔵「はっ」

段蔵、街道を飛ぶように引き返していく。

○牛久宿・鶴屋(朝)

政醇が晴れやかな顔で身支度をしている。

お咲は死んだように眠りこけている。

政醇はその顔を見て微笑み、刀をさして

立ち上がり、障子をそつと開ける。

お咲、布団の中で目を開く。

お咲の声「行っちゃまうのかい？」

政醇、振り返らず、

政醇「これ以上は待てん。先を急がねばならん」

お咲「ねえ、浪人さんの名前、教えてくれな
いかい。……嘘の名前でもいいからさ」

政醇「わしは嘘が嫌いだ。内藤政醇という」

お咲「ないとう、まさあつ……」

政醇「良い逗留であつた」

お咲「江戸に行くのかい？」

政醇「うむ、取手宿ならきつと落ち合えるで
あろう」

お咲「あたしも(連れていって)……」

政醇「ん？」

お咲「なんでもない。さっさと行きなよ」

政醇「さらば」

政醇、階段を下りていく音。

お咲「ないとうさま……」

お咲、顔を伏せて泣く。

○街道

編み笠をかぶり旅姿で歩く政醇。

○川のほとり

お咲、水に映った自分の顔を見る。

お咲「ないとう、まさあつさま……」

お咲、切ない顔。

お咲「今日は、天気が晴れ……」

お咲、空を見る。

お咲「今日は、川がきれい……」

お咲、水を掬う。

お咲「今日は、ちよつと腰が痛い……」

お咲、腰の余韻を押さえて哀しく微笑む。

お咲の背後に怪しい影が二つさす。(公

儀隠密の二人)

○取手宿の手前の原っぱ

湯長谷藩の一同、輪になって座っている。

大名行列のための道具が揃えられている。
相馬「これ以上遅れるとまずいな」

家来A「でも殿がいなくては……」

相馬「いや。仕方がない。取手宿には行列が通ると届けを出してある。殿無しで行列を組むぞ」

家来B「しかし、またどこかの大名にでも話しかけられたらいか致しますか？」

相馬「はっはっは、いくらなんでも、そう何度も鉢合わせぬわ。今までの参勤でも、まづはなかったことであろう？」

家来C「(ほっとして)そういえばそうですね」

相馬「ほれ、道中の安全祈願の札もこうして持っておる。御利益があるのだ」

相馬、懐から神社のお札を取り出してみせる。

家来D、走ってくる。

家来D「ご家老！ 渡り中間共がやってきました！ 何やら、給金が安すぎると、もめておりますが……」

相馬「なに？ 急ぎの旅と知って、足下を見よったか！」

相馬、お札を長持ちの上に置き、憤怒して立ち上がって、そろばんを懐から出す。

相馬「話をつけてくる。皆の者は行列の準備を頼むぞ」

一同「おう！」

家来A「ここまで来ればもう江戸は目と鼻の先じゃな」

長持ちの上のお札、風に吹かれて飛ぶ。

猿の菊千代、それを見て手を叩いている。

○取手宿・街道

T「取手宿」

湯長谷藩の大名行列が歩いている。

渡り中間も雇われている。

家来A「下に、下に」

町民たち、見物している。

町民X「なんか間が広くねえか？」

町民Y「ほんとだな。足が早いのかもな」

列の、人と人との間隔がかなり広く、それだけ長い行列に見える。

相馬「段蔵、殿を早く頼むぞ……」

行列が進んでいく。

前方から血相を変えて、家来Aが走って来る。

家来A「ご家老！ 大変でござる！」

相馬「いかがした？」

家来A「（進行方向右手の角を指して）卯（東）の方角から大名行列が！ このままではあそこで鉢あわせです！」

相馬「なんじやと！？ して、その大名は？」

家来A「それが……仙台藩・伊達吉村（だて

よしむら・50）様の行列です」

相馬「なに……相手は65万石か！」

相馬、青ざめる。

× × ×

仙台藩の行列が歩いている。

規模は2000人以上で、後ろがかすんで見えない。

× × ×

相馬「混雑する奥州道を避けてこちらに来られたか。これは我らが道を譲らねばならぬ定め……。一同、行列をやめて散れい！」

一同「おう！」

行列は散開し、渡り中間たちは去り、1

5人の湯長谷藩士が残る。

家来A「相馬様。早く伊達様の先頭を横切らないと、前に出ることは出来ませぬ」

相馬「わかつておる」

家来B「しかし、大名行列を横切ることはできません！……！」

相馬「あれをやるしかない……」

家来A「やはり……」

相馬「よし。おのおの方、着物を脱げ！ 一同「おう！」

みな、横道に飛び込んで、いっせいに着物を脱ぎ始める。

× × ×

仙台藩の行列の先頭。

仙台藩の家来「下に、下に」

行列の先を赤ふんどし姿の飛脚が通る。

馬上の仙台藩家老、それを見てつぶやく。

仙台藩家老「ほっほ。せいが出るな」

再び、飛脚が通る。

仙台藩家老「む……？」

さらに飛脚が通る。

そして飛脚が集団で通る。

仙台藩家老「これは奇天烈(きてれつ)な！」

○取手宿のはずれ

全員飛脚姿の湯長谷藩士が肩で息をして
いる。

相馬「うまくいったの！」

家来A「かなり怪しかったはず……」

家来B「なあに。飛脚と妊婦は行列の前を通

ってもよいという定めじゃ」

家来C、腹がだらしく出ている。

相馬「その腹！ お主は妊婦でもよかったな」

一同、笑う。

家来C「槍を扱うには、これくらいの肉がい
るのでござる」

家来B「ぶーっ！」

一同、さらに笑う。

家来A「して、殿はどういたしますか？」

家来A、心配そうな顔。

相馬「もはや刻限が危うい。こうなったら段
藏を信じて、我々は先を進み、殿が追いつ

くのを待とう」

家来A「はっ」

相馬「殿は今頃、全力で走っておられようか
らな！(熱い瞳で)」

○牛久宿の南・街道の外れ

政醇、草むらにしゃがみこんでいる。

政醇「やはり広いところで用を足すのは気持
ちがよいの……」

政醇、草を楊枝のようにくわえて恍惚の
表情。

○牛久宿の南の街道

飛ぶように北へ走っている段蔵。

段蔵「殿……、殿はおらぬか！」

段蔵がきよろきよろと走りすぎたあとに、

政醇が脇道からひよっこり出てくる。

政醇、後ろを振り返る。

走っていく段蔵に気づかない。

政醇「相馬たちは、まだ追いつかぬのか？」

まだ後ろにいと勘違いしている」

○牛久宿・川のほとり

お咲、川を見ている。

隠密Aの声「おい、女」

お咲、振り向くと、公儀隠密AとB。

隠密B「お前か？ 殿様のような男を相手に

したというのは？」

お咲「は？ なんのことだい？」

隠密A「内藤政醇という侍だ。本名を名乗って
るかどうかはわからんがな」

お咲「警戒して）知らないねえ。その人がど
うかしたのかい？」

隠密B「探しています。その侍はどこかで待
ち合わせをするはずですが、何か言ってい

ましたか？」

お咲「だから知らないって言ってるだろ？」

隠密A「ふん。嘘をついているな。我らはご
公儀の手のものだ。嘘をついている者は、

すぐにわかるのだぞ」

隠密A、お咲の腕を掴む。

お咲「ちよっと、何するんだい！ 離せ！」

隠密A、懐からクナイを取り出す。

隠密A「威勢がいいな。なあに、すぐしやべ
りたくなる」

隠密A、お咲の腕を折る。

お咲「あっ！ あああ……」

お咲、苦しむ。

隠密B「おい、やりすぎではないか？」

隠密A「お前は黙って見ておれ」

隠密A、酷薄な顔。

○牛久宿近くの街道

走っている段蔵、小さな悲鳴を聞く。

川のほとりに行ってみると、引き上げてくる公儀隠密の二人と、かち合う。

段蔵「お主ら……」

隠密A「まだこんなところにおったのか？」

話が違うではないか」

段蔵「わしがどこにいようと、わしの勝手よ」

隠密B「沈んだ様子でゆきましよう。ぐず

ぐずしてはおれません」

段蔵、隠密Aの着物の裾が血で汚れているのに気づく。

段蔵「おい。殺し合いでもしたか？」

隠密A「(ニヤニヤして)さてな」

隠密二人、段蔵の脇を駆けていく。

段蔵、川のほとりに行く。

そこには、手を折られ、全身傷だらけになった無残なお咲の姿がある。

段蔵「おい！ 大丈夫か！」

お咲「(朦朧として)ないとうさま……」

段蔵「なに!？」

お咲「あらしはね……昨日、うまい酒を飲ん

だんだ。あんなうまい酒、生まれて初め

だつらよ(口調が乱れる)」

段蔵「何を言うておる？」

お咲、がくんとつつむき、血を吐く。血

の中には折れた歯が点々と散らばる。

段蔵「お主……」

段蔵、お咲の胸元を開く。そこは火傷の痕だらけになっている。

段蔵「むごい……」

お咲「あらしはね……祝言らって思ってた飲んだんら……」

段蔵「内藤様はどうした。どこに行つた!？」

これ、気を確かにしゃべれ!」

お咲「わかっれるのはね、これからもう二度

と、あんなうまい酒は飲めないっれことさ」

段蔵「お主……」

お咲「だからね、好きになつて言っへやっ

たら。あいつらに。殺すぞつて言うから、

殺せてね。しゃべるもんか。そう思った
んらけるさ……」

段蔵「うっ……」

お咲「ごめんねえ……ないとうさま。痛くて、
痛くれ、どうしれも痛くれ、しゃべっちゃま
った。あらしは、最後まで役立たずだった
よ……」

段蔵「……」

お咲「あんた、内藤様の仲間らね」

段蔵「わかるのか？」

お咲「(頷いて)あの人を助けれ……。殺され

ちまう……」

段蔵「大丈夫だ。この段蔵、きつと内藤様を

お守りする」

お咲「ないろう……さまは、とりで……じゅ
くに……」

段蔵「もう発ったのだな？ よし、任せてお
け！」

お咲「フフ、あの人、おかしかつら……。私
の言うこと、全部信じて……。ほんろ、馬
鹿……ね」

お咲、事切れる。

段蔵、お咲のざんばらの髪からぶら下が
っている、珊瑚のかんざしを手取る。
立ち上がって、片手で拝む。

段蔵「どこですれ違った！！」

段蔵、走りだす。

○取手宿

T「取手宿」

政醇、早足で歩き、坂道を登っている。
坂の上から政醇の方に向かって大きな荷
車が勢いよく転がってくる。

政醇、逃げ場所がなく、驚いて固まった
ところに、段蔵が素早く出てきて、荷車
の車輪の間に伏せさせ、助ける。

荷車が通り過ぎると、クナイが飛んでく
る。隠剣でクナイを弾く段蔵。

段蔵「逃げますぞ」

段蔵、政醇を抱いて、街道脇の沼に飛び

込む。

そこに、すぐ公儀隠密の二人が駆けつけてきて、隠密Aが手裏剣を投げる。

水面に泡が浮いている。

隠密A「おのれ！」

隠密B「あやつ、まだ邪魔を！」

ごぼつと丸太が浮かんでくる。

隠密A「くそ、変わり身か……」

二人、歩み去る。

隠密Bの背中に、空から落ちてきた白梅の花びらが貼り付く。

沼の葦の間から二人を睨んでいる段蔵。

その後ろに政醇。

政醇「段蔵、どういたした？」

段蔵「いろいろと手違いがございました……」

段蔵、苦しそうな表情。

○取手宿近くの納屋

ワラの積まれた納屋。

その上で隠密Aと隠密Bが絡み合っている。隠密Aが隠密Bを後ろから攻め立てている。

隠密A「どうじゃ！ どうじゃ！」

隠密B「うお！ うう！」

隠密A「おのれ、段蔵！ 憎いやつ！」

隠密A、律動しつている。

隠密Bの背中に、白梅の花びら。

納屋の窓から白梅の花びらが流れ込んできている。

段蔵の声「そんなに憎いか」

隠密Aの首筋に刀があてられる。

隠密A「！」

隠密A、おそるおそる振り向くと、後ろに段蔵と政醇が立っている。

隠密A「ぶ、無礼者！ わ、我らは公儀の手の者なるぞ！」

段蔵「そのような格好で言われても、いささか迫力に欠けるのう」

政醇「余も、虎の威を借る狐が好きでない。

隠密は斬られても文句は言えぬ定め。なぜ

我らをつけ狙うか詳しく話してもらおう。
さあ、さっさと下帯をつけよ」

× × ×

隠密二人が縛られている。

段蔵「さあ吐くのじゃ」

隠密A「知らぬ。たとえ知っていても話さぬ
がな」

段蔵、懐から、白梅の花枝を取り出す。

段蔵、隠密Aのこめかみに枝の尖った先端を当てる。

段蔵「殿。ここから先は無残な忍びの責めになります。外に出ててください」

政醇「いや、よい。お主の手だけ汚させはせぬ」

段蔵「……さようでございますか」

段蔵、目を伏せ、枝をこめかみにめり込ませていく。

隠密A「うあ！ あ！ ひゃっ！」

白梅の花が下の方から赤く染まっていく。

段蔵「言わぬと、お主は人でなくなるぞ。よだれを垂らして歩き、肥だめの糞を食らって生きるようになる」

隠密A「(青ざめて)我は……忍び。のたれ死ぬ覚悟は出来ておる……」

政醇「しばし待て、段蔵。(隠密Aに向かって)我らは謀反などするつもりはないのだ。

上様に言えばきつとわかっていただけ」

隠密A「くくくく……。ははは。はーっはっはー！」

政醇「何がおかしい」

隠密A「おめでたい男よのう！」

政醇「なに？」

隠密A「これで一国の主とはな。あの女も浮かばれまいて」

政醇「女？」

段蔵「おい、黙れ！」

段蔵、隠密Aを殴る。

隠密Aの口から一筋の血が流れ落ちる。

隠密A「鶴屋の女よ。お咲といったか。あの女がお前の行く先を吐いた」

政醇「なに？ 手荒なことをしたのではない
だろうな？」

隠密A「ふふ、なかなかにしぶとくてなあ。
わしの責めにずいぶんと耐えてくれたもの
よ。戯れに犯そうとしたら、ひどく拒みお
つてなあ……」

隠密A、にやにや笑う。

隠密A「笑わせる。あれはきつと、お主のこ
とでも思っておったのだろう。飯盛り女郎
がなあ。腕をへし折っても吐かん。歯を全
部叩き折って、ようやくしゃべりおったわ。
はっはっは！ 最後は、婆あのように醜か
ったがのう！」

政醇、がっくりして首をたれる。震えて
いる。

それを見た隠密B、

隠密B「おい待て。あれはむごいことだった。
すまぬ……」

隠密B、ばつが悪そうな様子。

隠密A「馬鹿者。我ら、世のためになしたこ
とだ」

段蔵「誰の差し金か吐かぬのか？」

隠密A「我らはご公儀の……」

政醇、隠密Bの腕を居合いで切り飛ばす。

隠密B「ぎゃあああっ！」

隠密A「(隠密Bを抱きしめて)お、おまえ！

貴様！」

隠密A、政醇を睨む。

政醇「うぬらが人の心を忘れたなら、余も鬼
になろう。誰の差し金か吐かねば、お主の
男を殺す！」

隠密A「そんな！」

政醇、酷薄な表情で隠密Aを見る。

隠密B、転げまわっている。

隠密Aの頭に刺さった白梅が半分赤い。

○取手宿近くの道

政醇と段蔵、それぞれ馬に乗っている。

背後に隠密たちのいた納屋が見える。

政醇「やはり老中、松平信祝であったか」

段蔵「お取りつぶしにさせ、棚倉藩に併合させるつもりだったのですな」

政醇「棚倉は湯長谷のすぐ隣にある。藩主は信祝とは昵懇の仲じゃ。湯長谷藩を併合した後、そこから金(きん)の分け前を得る算段か」

段蔵「聞き及ぶところによると、信祝は老中首座の松平輝貞(てるさだ)様と江戸城で覇を争われているようで……」

政醇「くだらぬ。中央で威張りたいがだけのために、地方でつましく暮らしておる我らを犠牲にするとは！ それでも老中か！」
段蔵「無能を自覚するからこそ、権力を欲しがるのでござろう」

二人、走る。

背後で納屋が爆発する。

政醇、振り返る。

政醇「お前か？」

段蔵「御意」

政醇「なぜだ。奴らはもう動けぬようにした」
段蔵「殿様は人の恨みの本当の恐ろしさを知りませぬ。また知る必要もございませぬ」

政醇「……」

段蔵「まして相手は忍び。禍根はたたなければなりません」

段蔵、懐に手を入れ、珊瑚のかんざしを

政醇に差し出す。

政醇、手にとって、

政醇「これは……」

段蔵「拙者がお咲殿の最期を看取りました」

政醇「そうか……すまぬ。余と関わりおうたばかりにのう……」

政醇、目が潤む。

段蔵「……」

政醇「段蔵。なぜお咲と会ったことを言わなかった？」

段蔵「それがお咲にとってでは良かったであろう、と。遠くの地で知った者が元気で暮らしている——そんな思いは時に人を慰めるものでござる。殿にそう思っほしかった

に違いありません」

政醇「それでも余は隠し事が嫌いじゃ」

段蔵「……。内藤様を守って欲しい」

政醇「なに？」

段蔵「それがあの女の遺言でした」

政醇「馬鹿な！ なぜもっと、己のことを考えぬのか！」

段蔵「(取り合わず)拙者は内藤様を守ると約束しました」

政醇「……(唇をかむ)」

段蔵「しかし、殿様を慰めるつもりはございません」

政醇、頷く。

二人、歩く。

段蔵「殿様。拙者が酒を飲まぬことはお話ししましたな」

政醇「ああ。仔細があるのか」

段蔵「道中の色添えに、お話ししましょう。拙者はかつて、影さえ踏めぬと恐れられた忍びでござった。しかし、あれは6年前の暮れ……」

○(回想)野原(夕方)

風の吹いている草地。

向かい合っている段蔵(32)と甲賀の鵜飼

鬼丸(30)。

段蔵と鬼丸が向かい合っている。

忍術を駆使して、激しく戦う。

段蔵の声「自分より強い相手と初めて出会いました。その名は甲賀の鵜飼鬼丸」

手裏剣や刀での戦いの後、鬼丸が段蔵に馬乗りになる。

段蔵、地面の土をつかみ、それを鬼丸に投げつける。

鬼丸の目に土が入り、ひるんだところに、段蔵が斬りつけ、勝負が決まる。

○元の取手宿近くの道

段蔵と政醇、馬で走っている。

段蔵「卑怯な勝負でござった。あさましく土

を投げ……死にとうない一心で、そのまま
刺し殺してしまったのでござる」

政醇「……」

段蔵「生まれて初めて恐怖を覚え申した。そ
して拙者は酒におぼれ……腕も落とし、戸
隠流も追われるように抜けたのでござる」

政醇「なぜ、また酒を断ち、忍びに戻ったの
じゃ？」

段蔵「少し微笑んで」拙者には娘がござって
な。お美代と申す7歳の娘で……。もう一
度だけ顔が見たかったのでござる。そのた
めには立派な男として前に立とう、と……」

政醇「見たのか？」

段蔵「御意。牛久の近くにて、会い申した」

政醇「そのために案内人を引き受けたのか」

段蔵「左様です」

政醇「ふふん。会えて良かったではないか」

段蔵「もう二度と会えませぬ。そういう約束
でござる」

政醇「……」

段蔵「大変つらいものでござる」

政醇「馬鹿者。そうやって余を慰めておるで
はないか」

段蔵「違います。我が心の内を知っている者
が一人でもおれば、と。胸が張り裂けるよ
うなことを話せるのは、今、同じような境
遇の殿をおいて他になく……」

雨が落ちてくる。

政醇「急ぐぞ！」

二人、馬に鞭を入れる。

○利根川のほとり

T「利根川の渡し」

ごうごうと流れている川の前で立ち尽く
している政醇。

段蔵、走って来る。

段蔵「向こうの橋も崩れておりました。渡し
の船も止まっております」

政醇「あと少しというところで……!!」

段蔵「船頭たちに聞いたところ、幸い、相馬

殿「一行は既に川を渡られた模様でござる」
政醇「多分、このまま進み、江戸屋敷で待つておるだろう。登城の時が迫っておる！」

何か方法はないのか、段蔵！」

段蔵「拙者だけなら、なんとかかなり申すが……」

政醇、腕を組む。

政醇「よし。こうなれば仕方がない。段蔵、

お前一人で江戸に行き、相馬に策を伝えよ」

段蔵「策？」

政醇「実はな……」

雷が鳴って川がごうごうと流れる音。

何を言っているか聞こえない。

段蔵「……！ そんなことができるのですか？」

政醇「時間を稼げ。頼んだぞ」

段蔵「……御意！」

段蔵、雑囊から水グモを出す。

水グモを足に装着して、急流を渡り出す

段蔵。流されながらも川を渡っていく。

○松戸宿く千住宿の山中

湯長谷藩士たち、全力で走り抜けている。

○湯長谷藩の江戸屋敷・外(夕方)

T「湯長谷藩 江戸屋敷」

湯長谷藩士たち、駆け込む。

○同・中(夕方)

玄関内に倒れ込む、藩士たち。

奥から琴(21)が走って出てくる。

その面立ちが政醇に酷似している。

家来A「琴さま！」

琴「間におうたか！ それで殿は！ 兄者は
いずここにおわす！」

相馬「それが、途中ではぐれてしまいました。

後から追いかけて来るはずでござるが……」

琴「愚か者！ なぜお守りして来ぬのじゃ！」

家来B「待っておったのですが、殿は現れず、

刻限に間に合うよう、ぎりぎりの歩みで来

たのでござる。行列も大きな宿にては見せねばなりませんし……」

琴「ううむ……」

江戸屋敷の家来P、駆けてくる。

江戸屋敷の家来P「琴様！ 凧が庭に落ちてきました！」

琴「凧じゃと!?」

琴、江戸屋敷の家来の案内で走り出す。

○同・庭(夕方)

大きな凧にくくりつけられた段蔵が庭でうめいている。

琴と江戸屋敷の家来P、やってくる。

琴「これ！ そちは何やつじゃ！」

段蔵「……」

段蔵、(胸を強く打って)しゃべれず、懐から震える手で懐刀を取り出す。湯長谷藩の家紋がある。

琴「これは、兄上の！」

相馬の声「段蔵！ 段蔵ではないか！」

相馬、琴の後ろから駆けてきて、段蔵を抱き起こす。

家来たちもやってくる。

相馬「殿は！ 殿はどうした！」

段蔵、息も絶え絶えに、

段蔵「利根川があふれて、渡れなくなっております」

相馬「なに！ 間に合わぬではないか！」

段蔵「殿様は、妹が化けて登城するように、と」

琴「なんと！」

段蔵「はは……。確かに似ておりますな」

段蔵、苦しそうに笑う。

相馬「馬鹿を申せ！ 上様と話をせねばならぬのだぞ！」

段蔵「時間を稼げ、と。利根川が静まり次第、追いついて、江戸城で入れ替わるとのこと
でござる」

相馬「うーむ……」

段蔵「拙者はかつて、江戸城に忍び込んだこ

とがあり申す。殿を極秘裏に案内できるかと」

相馬、琴をちらつと見る。

琴「な、なんじゃ？ まさか……」

相馬「琴どの。申し訳ないが、鬚を結うてもらいます」

琴「わらわにまで芝居をせよと申すか！」

相馬「ふんどしまでつけよとは申しませぬ」

琴「(赤面して)当たり前じゃ！」

琴、相馬を引っぱたく。

○利根川・船着き場

焦れている政醇。

船の上から船頭が声をかける。

船頭「旦那！ そろそろ行けますよ！」

政醇「出せ！」

政醇、船に飛び乗る。

○江戸城の敷地(夜)

T「江戸城」

湯長谷藩の輿が行く。

相馬と、江戸屋敷の家来Pが付き添っている。

○同・輿の中(夜)

政醇に化けた琴が、頬をふくらませて男姿で座っている。

○同・輿の外(夜)

江戸屋敷の家来P、声をかける。

江戸屋敷の家来P「琴様。大丈夫にございますか？」

琴「心配せぬともよい。何やら胸がときめいてきた」

江戸屋敷の家来P「さようでございますか…

…」

琴「これが終わったら、深川に屋形船を浮かべて酒を飲もうぞ」

江戸屋敷の家来P「楽しみですな」

琴「そこもと二人でだ」

江戸屋敷の家来P「えっ！（照れる）」
琴「下手すれば我ら揃って打ち首じゃ。馬鹿
兄者のせいで、やりたいこともやらずに死
んでは浮かばれぬわ」
江戸屋敷の家来P「ひ、姫様、それがしもお
慕いしておりました！」
琴「知っておる。女から言わせるとは卑怯者
よ。は。ははは……」
江戸屋敷の家来P、嬉しそうな笑顔。

○江戸市中(夜)

早馬を飛ばしている政醇。

○湯長谷藩の江戸屋敷(夜)

政醇、馬で飛び込んできて、降りて転が
る。馬も倒れて、のびる。
かがり火をたいて、待ち受けていた家来
たち、いっせいに立ち上がる。

家来A「殿！」

家来B「殿っ！」

家来C「よくぞご無事で！」

政醇、刀を杖にして立ち上がり、

政醇「琴は……もう行ったか！？」

家来A「はっ！ 半時ほど前……」

政醇「段蔵はおるか！」

段蔵「素早くあらわれて」お乗りください」

段蔵、既に栗毛の立派な馬を準備して手
綱を引いている。

政醇「よし！」

政醇、飛び乗り、竿立ちになる馬を御し
て、外へと駆け出す。

家来A「殿をお送りするぞ！」

家来たち、厩へと走る。

○江戸市中(夜)

馬を飛ばしている政醇と家来たち。
段蔵は家々の屋根の上を走っている。

○江戸城の近辺の原っぱ(夜)

江戸城が近くに見える。

政醇が走っていると、その前に黒装束の男たち50人ほどが立ちふさがる。

政醇「何やつ！ どけえいっ！」

黒装束A「我ら、江戸城お庭番衆。詮議の件がある。立ち止まらりたい」

政醇「断る！」

黒装束B「何？」

黒装束Bが政醇に詰め寄ったところで、地面に白梅の枝が突き立つ。

黒装束Bが立ち止まると、自分の頭の上に、段蔵が立っている。

段蔵「うぬら、ご老中の手の者であろう」

黒装束B「うっ！」

黒装束B、あわてて、段蔵を振り払うが、気がつくと、180度首が真後ろを向いている。

黒装束B「なぜ、背中が見ゆる……」

黒装束B、後ろ向きに歩いて崩れ落ちる。

黒装束A「うぬ……。委細、承知のようだな。多くは言わん。死ね！」

黒装束の男たち、いっせいに抜刀する。

湯長谷藩士来たち、追いついてきて、馬から降り、政醇の横に並ぶ。

家来A「くつくつく……」

黒装束A「ん？ 何がおかしい」

家来A「我ら、武芸百般を極めた武士(もの)のふよ。うぬらのような、ぬるま湯に浸

かった糞忍びとはわけが違う！」

家来B「いかにも。我ら一人一人が一騎当千

！ 庭掃除をしている女々しい者どもに負けると思うてか！」

家来C「飛んで火にいる夏の虫とは、お前たちのことよ！」

家来たち、いっせいに刀を抜く。

皆、八相や青眼に堂々と美しく構える。

今度は、竹光ではなく、ちゃんと真剣を持っている。

家来C「行くぞ！」

家来C、太った体で物干し竿のような長い槍をぶんぶん振り回す。

近くにいたお庭番たちがはげげ飛ぶ。
家来A「我ら気が荒い。うぬら江戸衆が金の
上に胡坐をかき、なめきっていた小藩の力、
とくと見よ！」

家来A、黒装束Aと切り結び、黒装束A
の刀を叩き折る。
乱戦になる。

圧倒的に強い湯長谷藩が次々とお庭番衆
を倒していく。

段蔵「殿。今のうちに……」

政醇「うむ」

段蔵と政醇、江戸城に向かって走り出す。

○江戸城石垣(夜)

そそり立つ石垣。

段蔵と政醇、登っている。

そして石垣に四角く欠けているところが
ある。

段蔵「これでござる。ここは城内の汚れ水を
捨てる穴で、大奥に続いております。そ
こを抜ければ謁見の間まですすぐでござる」

政醇「……狭いではないか！」

段蔵「ここしか入れるところがござらん」

政醇「むう……」

段蔵「いかがしました。お咲どのが今の殿を
見たら何といわれるか……」

政醇「言うな」

政醇、穴に身を入れる。

ひゅん！と音がして、矢が段蔵の腕に突
き立つ。(政醇に当たるのを防いだ)

政醇「なんだ？」

段蔵「江戸城警護の忍びでござる。ここは拙
者がくい止め申す。早く中へ」

段蔵、鏃(やじり)を折って矢を抜く。

政醇「どうやって入れ変わる？」

段蔵「これを……」

段蔵、穴でかがんでいる政醇の後ろ手に
雑嚢を渡す。

段蔵「中に煙玉と、女中の衣装が入っており
ます。大奥は女の城、お気をつけされい」

政醇「わかった」

段蔵「お気をつけて」

政醇「段蔵……」

段蔵「はい」

政醇「お主は道に迷うたが、心はもう、迷うてはおらぬ」

段蔵「殿……」

政醇「大儀で、あつた」

政醇、穴に入っていく。

段蔵の左肩に矢が突き立つ。

段蔵「ふふ、ふふふ……」

段蔵、懐から、赤い折り鶴を取り出して見つめる。

段蔵「お美代……」

段蔵の足に矢が刺さる。

石垣には、下からぞろぞろと忍びが登ってくる。

段蔵「殿。お咲どのは、不幸などではなかったのだぞ……。忍法・雪中梅！」

段蔵、大量の白梅の枝を投げる。

枝は、登り来る忍びたちに刺さって血を噴き出し、花びらを赤く染める。

段蔵の上から手裏剣が飛んでくる。

段蔵「！」

段蔵、危うくかわす。

夜又丸「雲隠段蔵、覚悟！」

夜又丸、急峻な石垣に、(重力を無視して)直角に立ち、ぎらぎらと目を光らせている。

夜又丸「ワシは甲賀の鶉飼夜又丸。鬼丸は我が弟よ！」

段蔵「なに！？」

夜又丸「今こそ、兄のかたき！」

段蔵「そうか鬼丸の……。よし、参れ！」

段蔵、手印を組む。

○同・大奥(夜)

かつらをかぶり、女中姿になった政醇、顔を手で隠し、物陰を早足で駆け抜ける。

政醇「武士がこのような姿、人に見られては

二度と日の目を見れぬな……」

奥女中Aの声「これ……、待たれ」

政醇、右を見ると奥女中Aが、ぐらぐら

揺れる膳を10段ほど持っている。

奥女中A「手つどうてくれぬか」

政醇「……」

奥女中A「さあ、はよう……」

政醇「(男声で)これ！ 誰かおらぬか」

政醇は顔の上半分を隠し、口は見えてい
るが、動いてはいない。

奥女中A「あれ？ 上様？」

奥女中A、きよろきよろと見回す。

政醇、素早く逃げる。

○江戸城石垣(夜)

段蔵と夜叉丸、石垣に斜めに立って向か
い合っている。

段蔵「しばし待て」

夜叉丸「なに？」

段蔵、長い黒布で自分に目隠しをする。

夜叉丸「なんのつもりだ？」

段蔵「鬼丸との戦い、心残りがあってな。さ、

参れ」

夜叉丸「おのれ……！ 愚弄するかっ！」

段蔵と夜叉丸、宙を飛んで何合か切り結
ぶが、ふいに段蔵は力を抜き、棒立ちに
なる。

夜叉丸「捨てたか！」

夜叉丸が忍者刀で段蔵の右胸を貫く。

段蔵「戸隠忍法、奥義・鏡返し」

段蔵、夜叉丸の攻撃を左右対称に、鏡で
映すように、夜叉丸の左胸を脇差で貫い
ている。

段蔵「命を捨てねば勝てん。やはりあの時、

拙者は未熟でござった。これにて得たり！」

夜叉丸「無念……」

段蔵「忍びは仕える主によって変わる。信祝

などではのう……」

段蔵、夜叉丸の目を閉じてやる。

段蔵「しかし、これはいかぬな……」

段蔵、下を見ると、忍びの大群が蟻のように群がって、すぐ近くまで登ってきている。

下からクナイが飛んできて、段蔵の影に刺さる。

段蔵「ふん。影縫いか」

江戸城の忍びA「どうだ！ 動けまい！」

段蔵「わしは雲よ。好きなとき、好きなところに行く」

段蔵、懐から小さなひょうたんを取り出し、口へ中身を入れる。喉仏が動く。

段蔵「ふう……。久々の酒はたまらぬなあ！

お咲殿、お主が飲んだ酒もこのようなものであったか……！」

段蔵、にいと笑う。

段蔵「お主ら、わしがなぜ雲と呼ばれるか、本当の意味を教えてやろう」

手裏剣やクナイが次々と、段蔵の胸に突き立つ。

段蔵、複雑な印を結び、口から金銀の鱗粉を吐く。

段蔵「戸隠忍法、死奥義・乱れ蜘蛛！」

一天、にわかにかき曇り、超巨大な蜘蛛が、(摩天楼のキングゴングくらいに)江戸城の屋根に落ちてきて、城が揺れる。

江戸城の忍びA「うわっ！ うわああっ！」

段蔵「くく、幻よ……」

段蔵、自分の影に刺さったクナイを抜く。すると段蔵の影が枝のように別れて、全ての忍びたちの元に、生き物のように伸びる。

影は忍びたちの上で毒蜘蛛の群れとなつて、襲う。

次々と石垣から落下していく忍びたち。

石垣には段蔵一人が残っている。

体がどんどん溶けて崩れていく。

段蔵「フフ、士は己を知る者の為に死す。悪くないの……」

段蔵、笑顔になって、落下する。

草むらに落ちた段蔵の死体は溶けていき、

江戸城の屋根の巨大蜘蛛も消えていく。
段蔵の着物の上で、折り鶴と懐刀に挟ま
れるように、一本の白梅の枝が横たわっ
ている。

○同・城内・供の者の控え室・天井裏(夜)

政醇、女中姿で天井裏を進んでいる。

控え室を見つけて、天板をずらす。

下には、琴に付き添ってきた相馬が座っ
ている。

政醇「(小声で)兼嗣!」

相馬、声に目을上げ、

相馬「な、何者!？」

政醇「(かつらを取って)政醇じゃ!」

相馬「と、殿!」

政醇、唇に人差し指をあてる。

政醇「(小声で)騒ぎが起これば、城を混乱さ
せよ!」

相馬「は、はっ!」

政醇「よし」

政醇、天板を元に戻す。

○同・同・謁見の間の天井裏(夜)

政醇が覗くと、ひれ伏している大名たち
が見える。その中に信祝の姿を見つける。

政醇「おのれ、ここで会ったが百年目……」

政醇、下座に控えている琴も見つける。

政醇、煙玉を取り出し、投げつける。

ポトツ!という音。

煙は出ない。

政醇「……!(焦る)」

大名たちは、その玉を不思議そうに見て
いる。

小姓の声「殿の、おなーりー」

大名たち、姿勢をただす。

徳川吉宗(55)が、仕切りのすだれの向こ
うに座り、声をかける。

吉宗「苦しゅうない。面を上げよ」

すだれが巻き上がる。

琴も震えながら顔を上げる。

しかし、緊張のあまり、倒れてしまう。
ちやうどそこに煙玉があった。

琴の頭に当たって、ぼん！と爆ぜる煙玉。
一面、煙に包まれる。
ざわつく大名。

侍の声「くせ者じゃ！ 出会え、出会えいっ
！」
廊下を走る警護の武士たち。

○同・控え室(夜)

騒がしくなつて、相馬が障子を開ける。
廊下を人が走り回っている。

相馬「はて、どうすれば……。あつ、そうじ
や！」

相馬、懐からそろばんを取り出し、つる
つるの廊下に滑らせる。

そろばんは玉の回転で、勢いよく廊下を
転がっていく。

しかし、思い通りにはならず、人々の足
をすり抜け、誰も転ばず、廊下の突き当
たりの方へと虚しく転がっていく。

相馬「ううっ、やはり無理か！」

しかし、絶望した刹那、そろばんは突き
当たりで跳ね返ってきて、ついに侍Aの
足が踏んづけて、すっ転ぶ。

侍A「おのれ！ クセ者はこちらでござる！」

侍A、叫んで、人々が集まる気配。

相馬、慌てて障子を閉め、

相馬「よし。計算どおりでござる！」

○同・謁見の間(夜)

煙が立ちこめており、吉宗は避難してい
る。

政醇は天井から飛び降り、信祝の前に立
つ。

政醇「信祝、思い知れ！」

信祝「？」

政醇、信祝の顔を思い切りぶん殴る。

信祝「ぎゃああーっ！」

政醇「まだ足りぬな」

政醇、のたうつ信祝を見つめる。

○同・廊下(夜)

侍たちが集まってくる。

○同・謁見の間(夜)

政醇、琴を抱き起こす。

政醇「琴！目を覚ませ！」

琴「……兄様！」

政醇「ご苦労であった。さ、相馬の元へ帰れ」

琴、頷いて、着物の上を脱ぐ。

それを政醇が着る。

琴は政醇の着物を着て、煙っている廊下
に出て行く。

× × ×

煙が晴れ、吉宗も戻ってくる。

吉宗「くせ者は消えたようじゃ。面をあげい」

一同、面を上げる。

信祝「信祝だけうつぶせに倒れている。」

吉宗「信祝！いかが致した！」

信祝「むう……」

○同・信祝の視界(夜)

皆の姿がぼやけているが、だんだんはっ
きりしてくる。

信祝「こ、これは失礼を……」

まわりがざわついている。

吉宗「どうした信祝。顔がふくれておるぞ。」

それに、その格好はなんじゃ？」

信祝「はっ？何がござる？」

吉宗「その頭は何だと申しておる」

大名や侍たち、信祝を見て大笑いしてい
る。

○同・謁見の間(夜)

大名たちの笑い声。

信祝、女中のかつらをかぶせられ、無様
な姿をしている。

信祝、頭に手をやり、かつらをとって、

信祝「こ、これは！」

信祝の横にいるのは松平輝貞(てるさだ・71)。

輝貞「信祝殿……」

輝貞、堂々たる姿勢で座っている。

T「老中首座・松平輝貞」

輝貞「上様の御前であるぞ。自らのご趣味を晒し、どうするつもりじゃ？」

信祝「ち、ちがっ！」

吉宗「(笑いをこらえながら)女侍とは珍しい。しかし信祝、場をわきまえよ」

信祝「う、上様！」

吉宗「控えい！」

信祝「は……ははあっ……」

信祝、這いつくばる。

吉宗、政醇に向き直り、

吉宗「政醇。よく参上してくれたな」

吉宗、意味ありげに微笑む。

政醇「上様には、ご機嫌麗しゅう……」

政醇、頭を下げる。

吉宗「して、金山の方はどうじゃ」

政醇、懐から金色の石を取り出す。

政醇「これにございます」

信祝、石を妄執の視線で見つめる。

政醇「おそれながら、出たのは金ではなく、

鉄の一種でござりました。色は似ておりますが、山師の間では『慌て者の金』と呼ばれておるものです」

信祝「！」

吉宗「うむ。そうであったか」

政醇「よって金の産出なしとは誠の届け出でございます。誰かが功を焦り、勘違いしたのではないかと思われまする」

信祝「……！」

信祝、唇を噛む。

○江戸城・城門外(夜)

湯長谷藩の輿が外に出る。

江戸屋敷の家来P「(小声で)琴様？」

輿の窓が開く。

政醇、江戸屋敷の家来Pを見て頷く。

江戸屋敷の家来P「良かった！ ご無事で！」

江戸屋敷の家来P、政醇の手を握る。

政醇「やはり妹とそんなに似ているか、余は」

政醇、苦笑いする。

江戸屋敷の家来P「……！ し、失礼をつかまつりました！」

狼狽する江戸屋敷の家来P、ひれ伏す。

政醇「あのお転婆にも、そのように思うてくれる男がおったか……」

政醇、微笑む。

○江戸のはずれの原っぱ(日替わり)

湯長谷藩一行が、行列を組んでいる。

馬上には政醇。

相馬「帰りもまた行列。気を使いますな……」

政醇「疑いも晴れ、上様からもたつぷりと金子を頂いき、すぐに帰っても良いと言われたのじゃ。まあ、ゆるりと帰るとしよう。いろいろ無念もあつたが……」

前から、馬列が来る。

鷹狩りをしているらしい。

相馬「あ、あれは……」

旗に葵の御紋が見える。

政醇「上様……？」

馬列がこちらに来て、馬上の編み笠をかぶった男が湯長谷藩の駕籠に声をかける。駕籠の中には猿の菊千代。

編み笠の男「政醇。こたびは苦勞をかけた」

政醇「(腹話術で)う、上様……」

編み笠の男「構わん。余もしのびで来ておる。

窓は開けてよい」

政醇「はっ……」

編み笠の男「そこもとのおかげで、城内の膿を出すことができたのじゃ」

政醇「なんのことでござりますか？」

編み笠の男「信祝はな、醜い勢力争いで、悪行を重ねておつたのだ。おかげで腐った者たちの姿が全て明らかになったわ」

政醇「では信祝殿は……？」

編み笠の男「蟄居しておる。もつとも、生き

恥をかいて、かなり体調を崩したそうだが……」

○信祝の屋敷

布団で寝込んでいる血色の悪い信祝。

かたわらの籠に、九官鳥がいる。

九官鳥「コロセ！ コロセ！」

信祝の体が震えている。

○原っぱ

湯長谷藩一行と吉宗一行。

編み笠の男「信祝の不正の証(あかし)をつかむため、そこもたちには、参勤交代をしてもらった。ずいぶんと襲われたであろう」

政醇「不快そうにそれをわざと見ておつたと……」

編み笠の男「不服か？ 余は、弱い家来などいらぬ。そこもとの藩を強いと見込んだのじゃ」

政醇「そのことに憤ってるわけではござらん！」

護衛たち、びくつとして刀に手をかける。

編み笠の男「なに？」

政醇「牛久宿で、何も知らぬ哀れな女子が巻き込まれ、死に申した。こたびのことがなければ、死ぬことはなかった……」

編み笠の男「……政醇。お主は国の政(まつりごと)よりも女が大事と申すか？」

政醇、編み笠の男をにらみつける。

政醇『殿様だ、紀伊国屋文左衛門だつて言つても、同じ人間なんだよ。糞もすれば女も抱く。それなのに威張りかえって、こつちを下人扱いしやがる！ ふざけんじやない！』……とお咲は申しました」

編み笠の男「……ふむ」

政醇「拙者も、そう思います」

政醇、ひそかに、刀に手をかける。

政醇「上様、お咲に謝ってください」

護衛A「おのれ、上様に向かって無礼な！」

護衛A、駕籠に飛びついて窓を開ける。

中には猿。

護衛A「なんと！」

政醇、馬上で口を開く。

政醇「すみませぬ。拙者、駕籠に乗るのが苦手でしてな。声色(こわいろ)をつこうておりもうした」

編み笠の男の、馬の手綱を取っている男がふいに笑い出す。

馬の手綱取り(実は吉宗)「わっはっは！これは愉快じゃ」

政醇「？」

政醇、呆然として、手綱取りを見る。

馬の手綱取り(吉宗)「余の顔を見忘れたか？」

吉宗「お主も声色を使うとは驚いたぞ」

政醇「こ、これは！」

政醇、慌てて馬を下りる。

吉宗「馬上におるのは影武者じゃ」

政醇「(編み笠の男を見て)なんと……」

吉宗「余は痔を患ろうておってな。馬には乗れぬ」

政醇「さようですか……。実は、私も狭いところ

が恐ろしゅうてならぬのです……」

吉宗「はっはっはっは！」

政醇「ふ。ふふ、ふふふ」

吉宗「政醇よ。政ではな、どうしてもこのように嘘をつかねばならぬことがある。さもないとさらに大勢の不幸が出るのじゃ……」

政醇「……」

吉宗「そのお咲という女にはすまぬことをした……」

政醇、珊瑚のかんざしを取り出す。

政醇「これがその女の形見でございます……」

吉宗「あいすまぬ！」

吉宗、かんざしに向かって頭を下げる。

政醇、それを見て、ついにぼろぼろと涙をこぼす。

政醇「しかし上様。どうして我が藩が金山をこまかしていないと、信じられたのでしょうか？ 信祝が正しいとも考えられたでは

ありませぬか」

吉宗 「……おぬしの大根よ」

政醇 「えっ？」

吉宗 「去年の参勤交代で、大根の漬け物を献上したであろう。あれは、良かった。よく耕された土の味がしたわ。あのような大根を持つてくる者に、悪いやつなどおらぬ」

吉宗、笑う。

政醇、笑顔になる。

政醇 「それがしも、あの大根が大好きなのでございます」

吉宗 「ほんとうに、うますぎてな。毒見役が半分も食ってしまいおったわ。もう少しで手打ちにするところであった」

吉宗、悔しそう。

政醇 「そ、それはさすがに……」

吉宗 「政醇。また江戸に来る際には、持つてくるのだぞ」

政醇 「はっ」

政醇、頭を下げる。

吉宗 「よいか。政をおろそかにして、磐城の土を殺すでないぞ。この先、永遠(とわ)にな」

政醇 「はっ。大切にいたしまする！」

政醇、決意に満ちた表情。

吉宗 「あれは、良い土じゃ……」

吉宗、沈む夕陽に眼を細める。

吉宗 「鮮やかな日暮れよのう。どうじゃ政醇、ひとつ、あそこに向かって駆けぬか？」

地平線に美しい夕陽。

政醇、やや苦く笑う。

政醇 「走るのはもう、こりこりでございます」

(了)